

20 世紀ジャワにおける占術知識の再編 ——占星術家ウォン・カム・フーによるプリンボンの出版——

前 田 彩 希*

Reconfiguring Divination Knowledge in 20th Century Java: The *Primbon* Publishing of Astrologer Wong Kam Fu

MAETA Saki*

Abstract

This paper argues that *primbon*, divination and magical manuals popular in Javanese society, have functioned not merely as repositories of Javanese tradition but also as dynamic sites for the reconfiguration of knowledge. The study focuses on Wong Kam Fu, a twentieth-century astrologer and *primbon* publisher, as one of the Javanese modern intellectuals.

Based on data from 132 *primbons* collected by the author and on Wong Kam Fu's life history, the paper analyzes the composition and representation of divination knowledge in the *primbons* he published. Grounded in close reading of these publications, it traces how diverse traditions were translated, juxtaposed, and reassembled across shifting political and publishing conditions. The analysis finds that 1) marginal intellectuals in modern Java used *primbon* to actively intersect, reorganize, and mediate multiple divinatory traditions, and 2) foreign systems of divination were introduced into Javanese society through *primbon* publishing.

By foregrounding *primbon* publishing as a form of intellectual practice, the study highlights an alternative trajectory of knowledge production and circulation in modern Java and argues for the importance of incorporating marginal actors and divination knowledge into broader studies of Javanese intellectual history.

Keywords: Wong Kam Fu, *primbon* publication, divination knowledge, modern Javanese intellectuals

キーワード：ウォン・カム・フー，プリンボン出版，占術知識，近代ジャワ知識人

* 神戸大学大学院国際文化学研究科博士後期課程 日本学術振興会特別研究員（DC）；JSPS Research Fellow, Graduate School of Intercultural Studies, Kobe University, 1-2-1 Tsurukabuto, Nada, Kobe, Hyogo 657-8501, Japan
e-mail: sakimaeta11@gmail.com

DOI: 10.20495/tak.26002

2026 年 3 月 19 日 掲載決定, 2026 年 7 月 8 日 J-STAGE 早期公開

I はじめに

ジャワ社会¹⁾では、プリンボン（primbon）と総称される占い本あるいは呪術書が大衆向けに無数に出版され出回っている。プリンボンには、ジャワの民間暦を利用した占術の説明を中心に、儀礼の方法、呪文、薬の調合方法、予言、時にはジャワ神秘主義的哲学など、多岐にわたる呪術的知識が詰め込まれている。本論文では、20世紀に占星術や出版の分野で活動したウォン・カム・フー（Wong Kam Fu）と彼が出版したプリンボンに注目し、外来の占術がプリンボンの出版を通じてジャワ社会に紹介される過程、そこから導き出される知識人像を明らかにする。これにより、近代における占術知識の再編や媒介という動態を捉えるとともに、ジャワの知識人研究の対象を拡張し、近代における知識の多様な生産、流通のあり方の一つとして、プリンボンという媒体とその出版に関わった人々の重要性を指摘する。

プリンボンはこれまで、伝統的な知識を保持する媒体として、土着の世界観の分析や実践の記述が注目されてきた。つまり、知識の構造や保持という比較的静態的な側面が注目されてきた。これに対し本研究は、プリンボンが新たに創造されていく動態的な側面に注目するために、その出版に関わった人々を知識人として分析する。従来のジャワの知識人研究は、特に20世紀以降におけるナショナリストに重点が置かれ、歴史上の転換期において社会の周縁部にいた知識人が重要な役割を担っていたことを明らかにしている。しかしその一方で、近代の制度において周縁に置かれた占術や呪術に関わる知識の生産や流通を担った人物は、近代以前の文脈で部分的に考慮されているのみである。そこで本論文では、20世紀に活躍したウォン・カム・フーという人物に焦点を当て、プリンボンの出版に携わった人物や占術知識の複数の意味での周縁性を検討する。そして、占術知識を扱う人物が、どのようにそれぞれの時代状況に対応していったのかを分析し、占術知識の近代における変化とそれを担った人物の知識人としての側面を考察する。これにより、プリンボンの出版に携わった人々は、単なる伝統の継承の担い手なのではなく、時代の影響を強く受けながら既存の複数の伝統における占術知識を交錯させ、再編していた主体でもあったことが明らかになる。

本論文は、以下の構成で議論を進める。まず第II章では、既存のプリンボン研究を振り返り、プリンボンに再度注目する意義として、その出版に携わった人物の知識人としての重要性を示す。続いて第III章では、筆者がジャワや日本で閲覧、収集した132冊のプリンボンのデータに基づき、20世紀のプリンボンの出版の歴史を3つの時期に区分し、知識人にとってのプリンボンの変遷を整理する。その上で、プリンボンの出版史におけるウォン・カム・フーの位置付

1) 本論文においては、ジャワ語による文学作品やそれを元にした出版物が流通する範囲、読者層を想定してジャワ社会とする。

けを明らかにする。第Ⅳ章では、ウォン・カム・フーのライフヒストリーを通じて、彼がどのようにプリンボンの出版に関与するようになったのか、その背景に当時のどのような社会的、政治的状况があったのかを述べる。そして第Ⅴ章では、彼が実際に出版に関わったプリンボンにおける占術知識の構成や表象の変化を分析し、外来の占術がプリンボンの出版を通じてジャワ社会に紹介される過程を明らかにする。

Ⅱ プリンボンとジャワの知識人

1. プリンボンに関する研究

プリンボンは、一般的にジャワの伝統的な知識の集成や民間信仰の根幹をなす知識として考えられており、少なくとも19世紀末にはオランダ人ファン・ヒーによるプリンボンに関する記述がある〔van Hien 1896〕。その後、1920年代以降はオランダ構造人類学的研究の中で注目され、ジャワ人の思考体系を代表するものとして扱われた。占いのために曜日や方位、それらの解釈に関する記述が豊富なプリンボンは、分類とその要素の数や対応関係を把握するのに格好の材料であり、ピジョー²⁾らによって研究されている〔ピジョー 1987〔1928〕〕。1980年代にこれらのオランダ構造人類学的研究を日本に紹介した宮崎も、プリンボンの内容の分析を元に、ジャワの分類体系の複数性について論じている〔宮崎 1981〕。それ以降、プリンボンに関する研究は下火になったが、2010年代以降になると、インドネシア人研究者を中心に、プリンボンが人々の生活の中でどのように用いられているのかを民族誌的に記述する研究や、現代生活においていかに活用するかという研究が行われるようになった〔Larastiti and Ahimsa-putra 2022; Utami *et al.* 2019 など〕。

上記の研究を通じて、農民を中心にジャワの人々がどのように世界を認識しているのか、民族誌的知識としてプリンボンがいかに継承され、利用されているのかという読者、実践者側の記述、分析が進んできた。その一方で、近代におけるプリンボンの動態についての注目は少ない。その中でも宮崎は、当時のジャワの人々にとっての占いのあり方の変化を現地調査に基づいて明らかにしている。宮崎は、プリンボンのテキストが農村部まで浸透し、大衆化していたこと、口承の知識がテキストに吸収されている一方で断絶もあることなど、プリンボンに関する実践について論じた〔宮崎 1983〕。こうした知識の流通状況の変化への注目は非常に重要であるが、出版の背景状況までは検討されていない。多くの研究では、調査の対象として用いられているプリンボンが、誰によって、どのように出版されていたのか、その知識がどのように

2) プリンボンを対象に分析を行ったピジョーは、ジャワにおける方位、曜日、色、神々などの集合を例に、ジャワでは四-五分体系と双分体系が人々の思考を支えていることを明らかにしている〔ピジョー 1987〔1928〕〕。

生み出されたものであるのか、という出版に注目する視点は軽視されていた。例えば、資料として任意のプリンボン1冊がその特徴などが示されないまま分析に用いられ、プリンボン全体を論じるものになっている。これは、プリンボンと言った際に、暦や数字の計算を用いた占術という内容で、どの本も比較的統一されていると暗黙に想定されていることがあると考えられる。

その一方で実際には、プリンボンは商業的な戦略とも絡みながら、大小様々な出版社から多岐にわたる内容で出版されてきた。こうしたプリンボンの出版における変化やバリエーションに注目することが、その動態を捉える上では非常に重要である。特にプリンボンの一般への普及は出版資本主義に支えられている。旧来の手写本のプリンボンは、宮廷文学者や農村部のキアイ (kyai)³⁾ など、ジャワ文字やジャウィ文字のリテラシーがある一部の知識人に限られており、秘匿されるものだったと考えられる。例えば、1960年にスラバヤで調査を行った西村は、手をつくしても呪医ドゥクンにプリンボンの文書を見せてもらえなかったと記述している [西村 1963: 495]。さらに先述のファン・ヒーンは、秘儀的な知識をドゥクンとの誓いを破って公表してしまい、その後消息不明になったとも言われている [Ad Rek 2013]。⁴⁾ 詳細は次章で検討するが、こうした知識が、出版資本主義が基盤となって展開した近代で大きな変化を迎える [アンダーソン 2007 [2006]]。特に、インドネシアでは20世紀の間に徐々に出版数が増え、今では安価で手軽に読める本として人々の間に浸透している。この変化の過程に迫ることで、占術知識や秘儀的な知識、その担い手としての近代を描き出すことが可能になるのである。

このようにプリンボンは、ジャワの農民の世界観や実践の保持を記述する中で注目されてきた。これに対し、本論文では、出版に携わった人物を掘り下げることで、20世紀のジャワにおいて占術知識が再編され、媒介され、流通していく近代的、動態的側面に光を当てるものである。

2. ジャワの知識人とその周縁性

プリンボンの出版に携わった人々の詳細については、匿名にされることも多く不明な場合がほとんどだが、著者とされる人物の名前の称号からある程度推察できる。ラデン (Raden, 略称 R.) がつく名前は王族関係者であると考えられ、キ (Ki)⁵⁾ やンバ (Mbah) がつく名前は、村落において尊敬を集める人物であることが想定される。具体的には、豊富な宗教的知識や経験によって、人々に助言を与える賢人オラン・ピントル (orang pintar) や、呪医ドゥクンが想

3) 老人、学識者、神聖な財宝に与えられる尊称。ジャワではブサントレンなどを運営するイスラーム指導者ウラマーの意味でも用いられる他、呪医ドゥクン (dukun) に対しても用いられることがある。

4) オランダ領東インド期の歴史に関心のあるオランダ人によって運営されているブログ『ジャワポスト』に投稿された記事である。この記事の内容は、著者が1960年代半ばに、インドネシア滞在歴があり、神智学に詳しい80代の女性から聞いた話に基づいている。真偽は定かではないが、神智学や呪術的知識に関心の高いオランダ人の間で、ジャワにおいて呪術的知識が秘儀的なものであり、それを出版する行為が禁忌であると考えられていることがわかる。

5) キアイに用いられる敬称。

定される。こうした人物に共通する特徴として、大衆からは卓越したリテラシーを獲得し、そこから得られた知識を利用しているという点がある。そこで本論文では、こうした人物を知識人として分析することとする。

ベネディクト・アンダーソンは、*Language and Power: Exploring Political Cultures in Indonesia*の中で、知識人 (intelligentsia) として占星術家に言及している。アンダーソンは、伝統的なジャワ、近代以前のジャワにおいて行政構造に統合された知識人として占星術家を扱っており、宮廷詩人 (pujangga) などと並べている。しかし、アンダーソンがここで注目したのは、こうした行政構造に統合された知識人とは異なる知識人である。彼は、20世紀以前の時代も含めたより歴史的な視点から知識人の役割を捉えることを試み、時代に関わらず支配者の下に置かれた知識人と、その支配を批判する知識人が存在してきたことを指摘した。行政構造に統合された知識人に対し、支配を批判する知識人は、行政構造に統合されず社会の周縁 (the fringes of society) にいた人物だったとする [Anderson 1990: 63]。

そして、支配者側の知識人と支配を批判する知識人は、それぞれの時代で異なる関係を築いていた [ibid.]。例えば、伝統的国家の時代の文脈では、支配者側には先述の宮廷詩人、占星術家、王への官位の無い助言者、宮廷に取り込まれたイスラーム役人 (penghulu) を挙げ、支配に対する批判者側には、前イスラーム期の隠者や賢人 (resi, begawan, ajar)、イスラーム浸透後の「在野の」キアイを挙げた。「在野の」キアイというのは、イスラーム知識人の中でも、地方村落にとどまって独立した威信を持ち、普段は政治に干渉しないが、特定の政治的混乱期に政治参画するような人物を指している [ibid.: 63-65]。

本論文の対象と重なる近現代 (19世紀後半～1970年代) の文脈では、支配者側の知識人として植民地期後期の土着の植民地官僚、独立後のスカルノの側近の行政官を挙げた。そして支配に対する批判者側として、植民地期後期のナショナリスト、独立後の1945年と1965年に政治参画したキアイ、都市知識人⁶⁾を挙げた [ibid.: 65-67]。アンダーソンはさらに他の章で、文学作品における表現に注目し、ナショナリストによる伝統と近代の両立や、フランスの百科全書派に類似した革命性などを議論している [ibid.: 241-298]。こうした伝統と近代の間に立って両者の間を揺れ動きながら改革を目指す人々も、近代へ移行する時期のジャワの批判者側の知識人と読むことができる。

アンダーソンは、知識人を支配者側と支配への批判者側に分けることで、時代ごとの両者の関係の可変性や、それらの関係がジャワの支配体制とその転覆の歴史に通底していること、さらには批判者側の知識人は社会の周縁部にいたことを捉えた。このアンダーソンの議論では、

6) ここでは、西洋式教育を受けた知識階層 (kaum intelektual) と呼ばれた人々を指してインテリゲンツィアという言葉を用いている [Anderson 1990: 66]。

批判者としての知識人が支配の中心地から物理的に離れた山中や地方村落に住んでおり、行政構造に統合されていないということが周縁性として捉えられていることがわかる。

土屋健治も同様に、歴史的な視点で知識人に関して論じている。土屋は、知識人を、知識や教養を持つがゆえに制度内的に享受しうる特権を拒否してでも、世界のパラダイムに異議を申し立てたり、それに代わる新しいパラダイムを開示したりするインテリゲンツィアとした〔土屋 1990: 310〕。ここでも、制度的特権を拒否するという行政構造に完全に統合されない側面、既存のパラダイムに対し異議や代替案を提示するという批判者の側面が強調されている。

さらに土屋は、二つの異なる社会や文明を往還する中で活躍し、伝統と近代を統合しようと試みた知識人についての分析を行っている。土屋は、タマン・シスワの設立者スワルディのオランダ滞在前後（1913年～1922年）の思想的変化を分析し、ナショナリズム萌芽期のジャワ知識人が、どのように西欧の影響を受け、政治的問題の延長線上にジャワの文化的問題に対する関心を位置付けたのかを説明している。その中では、オランダに滞在したスワルディが、近代社会を批判して東洋思想に注目する神智学の影響を受け、古代インド哲学の正当な後継者としてジャワ文化の価値を近代批判の最先端にあるものとして示していったことが明らかにされた〔土屋 1978〕。この土屋の論考からは、当時のジャワの知識人が、ジャワ社会とオランダ社会、ひいては東洋と西洋の間に置かれたことで、ナショナリズムと西洋近代批判としてのジャワ的伝統とが合致する思想が生み出され、それがその後の国民国家形成の礎になったことがわかる。この土屋の論考は、単に西洋近代の先にジャワの伝統を位置付けていたことに注目しただけでなく、インド哲学等の当時の西洋人の関心を集めていた幅広い東洋思想との関係が見えてくるという点で意義がある。これは、知識人の活動や出版物を通して、統合されたり、位置付け直されたりする思想的伝統の複数性を捉える上で非常に重要である。

クリフォード・ギアツも、1950年代の調査時に村落にいた知識人について議論を行っている。ギアツは、ジャワ神秘主義に結びつけて説明されるエリート階級ブリヤイについて論じ、その中で文化人類学者ロバート・レッドフィールドによる知識人の二側面の区別を彼らにも適用した〔Geertz 1960: 235〕。レッドフィールドは、都市文明と接触する民俗社会の変容を主題としており、その中で古い道徳的秩序を破壊し、新しく高次の道徳的秩序を創造し、形式化、制度化する、そうした大伝統の創出を担う人物として、都市のエリート層に注目した。彼は、知識人の中でも支配的になる文化に囲まれて「学者的態度」を持ってその文化のレベルを押し上げるようなエリート的な人物をリテラーティ、2つの世界に属して「マージナル・マン」として両者を媒介するような人物をインテリゲンツィアとした〔レッドフィールド 1978 [1953]: 50-51〕。

ギアツは、このレッドフィールドが注目したリテラーティとインテリゲンツィアという知識人の二側面を示す用語を用いて、1950年代の調査時のブリヤイを説明した。彼は、ジャワにオ

ランダ風西洋文化が侵入してくる当時の状況を念頭に置き、ジャワのエリート層プリヤイが神秘主義、汎神論、宮廷のエチケットといったリテラティ的側面を持つ一方で、プチ・ブルジョワ的な要素を取り入れ、オランダ語の使用を好むインテリゲンツィア的側面も持つことを見出した [Geertz 1960: 235-236]。ここからは、ギアツがプリヤイをジャワ社会と西洋社会の間を揺れ動く存在として、2つの社会の境界的な部分にいたると考えていたことがわかる。

アンダーソンや土屋、ギアツのジャワの知識人に関する議論では、支配の制度の外側、社会の周縁部にいた知識人こそ、複数の秩序が衝突し、混乱を迎えていた時期において、外部から知識を取り込んで既存の知識を批判し、新たな秩序を構築する役割を担っていたことが強調された。こうした知識人を支配者側／批判者側、あるいはリテラティ／インテリゲンツィアに分ける視点は、国民国家形成の重要な過渡期にあったジャワ社会を理解する上で必要なものであったが、一方で当時のジャワの知識人が置かれた思想的な状況をジャワの伝統と西洋近代の二項対立的な理解に還元してしまう恐れがある。20世紀のジャワにおける知識人が置かれていた思想的な状況は、単にジャワの伝統と西洋近代の二項で片付けられるものではない。この点で土屋 [1978] の論考は示唆的であるが、東洋思想を西洋から逆輸入するような状況に焦点が当たっているため、ジャワ社会の中でどのような思想の交錯が起こっていたのかは十分に論じられていない。上記の研究で批判者側あるいはインテリゲンツィアとされた知識人も、その内実は様々であった。20世紀のジャワ社会をめぐるのは、西洋近代との関係以外にも、インドネシアにおける華人とその伝統の位置付けをめぐる問題や、イスラーム復興の影響など、複数の要素が複雑に交錯していた。こうした東西を問わない複数の思想の統合がジャワ社会の中でどのように模索されたのかという点で、課題が残っている。

この課題を考える上で、ウォン・カム・フーによるプリンボンの出版事例は重要である。プリンボンは、後述するように、各時代の政府による出版統制を避ける中で展開されてきた歴史を持ち、支配の目をかいくぐる媒体となっていた。そして、そのプリンボンの歴史的展開の一端を担った人物こそウォン・カム・フーである。彼は、ジャーナリストとしての活動など、先行研究で取り上げられていたナショナリストらと共通する特徴を持ちながらも、華人として複数の国や地域にまたがって活動し、主に占術知識を取り扱ったことに特殊性がある。彼は、先行研究で注目されてきた周縁部にいた知識人に対してさらに周縁的な立場にあり、批判者側の知識人の内在的多様性を象徴する存在である。加えて、アンダーソンの研究の中では、占星術家を知識人として言及している部分があるが [Anderson 1990: 63]、それは伝統的な国家の時代における支配者側の知識人としての言及にとどまっている。それ以降、特に近代における占術知識の担い手についてはこうした観点から考察されていない。そこで、本論文では、近代におけるプリンボンの担い手として代表的なウォン・カム・フーを取り上げ、知識人の多様性と、近代における占星術家の知識人性について考察する。

III プリンボンの出版史概略

具体的にウォン・カム・フーによる出版を分析する前に、本章ではプリンボンが20世紀の間にどのように出版されてきたのかを3つの時代区分によって概観し、プリンボンがウォン・カム・フーをはじめとする知識人にとってどのような媒体だったのかを明らかにする。またこれによって、従来の研究におけるプリンボンの認識に、出版史という動態的な視点を加える。筆者は2022年8月～2026年1月にかけて、日本とインドネシアの図書館、デジタルアーカイブ、ジャワの古書店やオンライン書店、個人所有のプリンボンを閲覧あるいは収集してきた。表1では、これまでに閲覧あるいは収集したプリンボンをもとめている。⁷⁾ 筆者は表1におけるタイトル、発行年、使用言語といった書誌情報の傾向に基づいて、20世紀におけるプリンボンの出版を、第1期：1930年代～1950年代初頭、第2期：1950年代～1970年代、第3期：1980年代以降、の3つの時期に区分した。しかし、これらの区分は明確に線引きができるものではないことに注意が必要である。

先述したように、プリンボンの内容は占いの方法、予言、結婚や葬式などの儀礼の手順、特定の症状に効く呪文や薬など多岐に渡るが、その中心になるのは七曜と五曜の組み合わせによるジャワの民間暦とその計算を用いた占いである。⁸⁾ この七曜と五曜が組み合わされた35日のサイクルの中で、人の性質や物事の吉凶を読み取ること、各曜日に結び付けられた数字を計算することが重視されている。この占いは様々な場面で用いられるが、特に結婚相手との相性、重要な儀礼や仕事の日取りの吉凶、個人の性格を確認する際に用いられることが多い。この占い結果の算出方法とその解釈は非常に複雑なものとなっており、それを大衆向けによりわかりやすく、あるいはより完全に説明しようとするのが、プリンボンの出版の動機や需要に結びついていた。そのため、20世紀の間に様々な出版社から少しずつ差異化されたプリンボンが出版されてきた。

プリンボンの起源は不明な点も多く本論文では論じないが、活字出版されたものに限れば、インドネシアへの印刷出版技術の導入の歴史を踏まえ、19世紀末から20世紀前半頃であろうと想定される。一般向けに大量印刷、出版されたプリンボンの先駆者の一人として考えられるのは、インドネシアにおける私営出版黎明期の一端を担っていた華人タン・クン・スウィ（Tan Khoen Swie 陳坤瑞，1883?–1953）である。タン・クン・スウィは、1919年～1956年にかけて、R・タノヨ（R. Tanojo）などのスラカルタで知り合った宮廷文学者らの協力を得て、プリンボン

7) この表で取り上げたのは、タイトルあるいは副タイトルに「プリンボン」と表記されているものに限った。紙幅の都合上、一部副タイトルが長いものは省略している場合がある。発行年が「推定」とされているものは、綴字法や出版社名、印刷の特徴などから時代区分を推定したものである。ウォン・カム・フーが関係するプリンボンには網掛けを施している。

8) プリンボンにおけるこの占いの体系的説明やその詳細に関しては、宮崎 [1981; 1983] を参照のこと。

表 1 筆者が閲覧・収集したプリンボン一覧（筆者作成）

時期区分	通し番号	タイトル	著者	発行年	出版社	言語
第 1 期	1	Serat Primbon	—	1930	Pendorep & Co (Boekhandel Diwarno)	ジャワ語 (ジャワ文字)
	2	Primbon Ngadoe Djago	—	1938	Boekhandel Tan Khoen Swie	ジャワ語 (ジャワ文字)
	3	Resep Djampi Djawi	Tan Khoen Swie	1939	Boekhandel Tan Khoen Swie	ジャワ語 (ラテン文字)
	4	Boekoe Wirasat Djawa	—	1939	Boekhandel “Bing Sien”	インドネシア／ムラユ語
	5	Primbon Djampi Djawi	Brata Suparta	1949	Boekhandel Tan Khoen Swie	ジャワ語 (ジャワ文字)
	6	Primbon Katuranggan: Manuk Brekutut Mauk Gemak	—	1950	Toko Buku Mahadewa	ジャワ語 (ラテン文字)
	7	Primbon Djajabaya	Raden Ngabei Ronggowarsito	1951	Boekhandel Tan Khoen Swie	ジャワ語 (ラテン文字)
	8	Primbon Pawukon	—	1952	Maha-Dewa	ジャワ語 (ラテン文字)
	9	Parimbon Ngelmu Chak Sedjati	Raden Tanojo	1952	Boekhandel Tan Khoen Swie	ジャワ語 (ラテン文字)
第 2 期	10	Primbon Sapta Pandita	—	1953	Toko Buku Redjeki	インドネシア／ムラユ語
	11	Primbon Puspa Wahju	—	1953	Pustaka “Gajabaru”	インドネシア／ムラユ語
	12	Parimbon No. 1 Nja Eta Rupa-Rupa Alamat	M. I. Prawira-Winata	1953	Toko Buku S. King	スダ語
	13	Almanak Primbon Djawa Th.1956	—	1953	Sadu-Budi	ジャワ語 (ラテン文字)
	14	Perimbon Pusaka Nenek	Mbah Djojo	1953	Modern	インドネシア／ムラユ語
	15	Primbon Khong Beng Sin Kwa	Go Hway Yong Sian Seng	1954	Tjerman	インドネシア／ムラユ語
	16	Kitab Primbon Betal Djemur	Kanjeng Pangeran Harya Tjakraningrat	1955	Soemodidjojo Mahadewa	ジャワ語 (ラテン文字)
	17	Almanak Primbon Djawa/ Darmagandul	K. R. T. Tandanagera	1957	Sadu-Budi	ジャワ語 (ラテン文字)
	18	Primbon Embah Njata	Tan Swie Hong Toodjin	1957	Tjerman	インドネシア／ムラユ語
	19	Primbon Klairan Djangkep	R. Mugihardjo (Mbah Lantip)	1957	Keng	ジャワ語 (ラテン文字)
	20	Primbon Jawa: Kangege Petung Kelahiran	R. Mugihardjo (Mbah Lantip)	1958	—	ジャワ語 (ラテン文字)
	21	Primbon Nudjum Djawa Sedjati	R. Mugihardjo (Mbah Lantip)	1958	Keng	ジャワ語 (ラテン文字)
	22	Primbon Nasib	Tedjohadisumarto, R.	1958	Pustaka Adi Penunping 24	インドネシア／ムラユ語
	23	Primbon Tata Tjara Kasripajan	R. Tanojo	1958	C. V. Serodja	ジャワ語 (ラテン文字)
	24	Primbon Nasib Manungsa	R. Mugihardjo (Mbah Lantip)	1958	Keng	ジャワ語 (ラテン文字)
	25	Primbon Jawa: Sangkan Paraning Manungsa	R. Mugihardjo (Mbah Lantip)	1959	—	ジャワ語 (ラテン文字)
	26	Primbon Jokromanggilingan	R. Mugihardjo (Mbah Lantip)	1959	Keng	ジャワ語 (ラテン文字)
	27	Primbon Sabda Sasmaja	Sang Indrdjati	1959	Sadu-Budi	ジャワ語 (ラテン文字)
	28	Pusaka Gaib Sekti Linuwih: Primbon Pandita Djati	Ki Sastrahandaja	1960	Muria	インドネシア／ムラユ語
	29	Perimbon Wanita & Horoscope	Wass, Musannif Effendie	1960	—	インドネシア／ムラユ語
	30	Primbon Kelahiran Manusia	Wong Kam Fu	1961	Tjerman	インドネシア／ムラユ語
	31	Primbon Pamiwahaning Ngagesang	R. M. Ng. Tiknopranoto	1961	Pelajar	ジャワ語 (ラテン文字)
	32	Serat Kidung Nabi Lan Kadis Djangka	—	1961	Kulawarga Bratakesawa	ジャワ語 (ラテン文字)
	33	Primbon Djawi Adji · Wara	Eddy T. Sutrisno	1961	Mas	ジャワ語 (ラテン文字)
	34	Primbon Djawa Bektj Djamil	R. Tanaya	1961	Sadu-Budi	ジャワ語 (ラテン文字)
	35	Primbon Langen Swara	Probohordjono, R. Ng. S.	1961	Ratna	ジャワ語 (ラテン文字)
	36	Primbon Embah Njata	Tan Swie Hong Toodjin	1961	Tjerman	インドネシア／ムラユ語
	37	Perimbon Pusaka Agung	Mbah Slamet	1962	Usaha Baru	インドネシア／ムラユ語
	38	Primbon (Vademecum) Politik	H. A. Notoetardjo	1963	Endang	インドネシア／ムラユ語
	39	Primbon Kelahiran Djankep	R. Mugihardjo (Mbah Lantip)	1964	Keng	ジャワ語 (ラテン文字)
	40	Primbon Pulang Geni	R. Mugihardjo (Mbah Lantip)	1964	Keng	ジャワ語 (ラテン文字)
	41	Primbon Dampoo Awang	Bing King Tjioe	1964	Tjerman	インドネシア／ムラユ語

表1 続き

時期区分	通し番号	タイトル	著者	発行年	出版社	言語
第2期	42	Primbon Ilmu Adjaib: Saduran Dari Kitab Tinghoa	Tan Boen Kim	1966	Tjerman	インドネシア／ムラユ語
	43	Primbon Djojobero	Wong Kam Fu	1966	Tjerman	インドネシア／ムラユ語
	44	Primbon Sabdo Pudjonggo: Petangan Djangkep	R. Tanojo	1966	Sri Muljo	ジャワ語 (ラテン文字)
	45	Almanak Primbon Djawa 1969	—	1969	Sadu-Budi	ジャワ語 (ラテン文字)
	46	Primbon Dampoo Awang	Bing King Tjioe	1970	Tjerman	インドネシア／ムラユ語
	47	Primbon Agung Budaja Naluri	R. Tanaja	1971	—	ジャワ語 (ラテン文字)
	48	Primbon Aji-Saka (In Almanak Dewi Sri 1973)	Kamadajaja (Kartono Pk. Kamadajaja)	1972	U.P. Indonesia	インドネシア／ムラユ語
	49	Primbon Aji-Saka (In Almanak Dewi Sri 1974)	Kamadajaja (Kartono Pk. Kamadajaja)	1973	U.P. Indonesia	インドネシア／ムラユ語
	50	Primbon Do'a	T. Djono	1974	Carya Agency	インドネシア／ムラユ語
	51	Primbon Djawa: Pandita Sabda Nata	R. Tanojo	1974	—	ジャワ語 (ラテン文字)
	52	Kitab Primbon Betaljemur Adammakna	Kanjeng Pangeran Harya Tjakraningrat	1975	Soemodidjojo Mahadewa	ジャワ語 (ラテン文字)
	53	Primbon Jawa Bakti Jamal	R. Tanaya	1975	Sadu-Budi	ジャワ語 (ラテン文字)
	54	Kitab Primbon Betaljemur Adammakna	Kanjeng Pangeran Harya Tjakraningrat	1976	Soemodidjojo Mahadewa	ジャワ語 (ラテン文字)
	55	Kitab Primbon Betaljemur Adammakna	Kanjeng Pangeran Harya Tjakraningrat	1976	Soemodidjojo Mahadewa	ジャワ語 (ラテン文字)
	56	Primbon Aji-Saka (In Almanak Dewi Sri 1978)	Kamajaya	1977	U.P. Indonesia	インドネシア／ムラユ語
	57	Kitab Primbon Lukmanakim Adammakna	Ny. Siti Woeryan Soemadiah Noeradyo	1978	Soemodidjojo Mahadewa	ジャワ語 (ラテン文字)
	58	Primbon	Ny. Siti Woeryan Soemadiah Noeradyo	1978	Somodidjojo Mahadewa	ジャワ語 (ラテン文字)
	59	Primbon Ajimantrawara Yogabrata Rajahyogamantra	Ny. Siti Woeryan Soemadiah Noeradyo	1978	Soemodidjojo Mahadewa	ジャワ語 (ラテン文字)
	60	Primbon Lengkap Untuk Wanita	Anjasmara	1979	Karya Utama	インドネシア／ムラユ語
	61	Primbon Kelahiran & Nasib Praktis-Populer	A. Broto	1979	Sari Jaya	インドネシア／ムラユ語
	62	Kitab Primbon Atassadhur Adammakna	Ny. Siti Woeryan Soemadiah Noeradyo	1979	Soemodidjojo Mahadewa	ジャワ語 (ラテン文字)
	63	Primbon Wali Sembilan	Wirjapanitra	推定	Sadu-Budi	インドネシア／ムラユ語
	64	Primbon Djawa Pawukon	R. Tanojo	推定	Pelajar	ジャワ語 (ラテン文字)
	65	Primbon Sabda Pandita	R. Tanojo	推定	Trimurti	ジャワ語 (ラテン文字)
	66	Primbon Gending Humbul Donga	—	推定	—	ジャワ語 (ラテン文字)
	67	Primbon Pusaka Jawa: Jangka Jayabaya Pranitiwakya	R. Ng. Ranggawarsita, R. Tanojo	推定	Pelajar	ジャワ語 (ラテン文字)
	68	Primbon Pusaka-Wasiat- Djimat, Kraton-Kraton, Tanah-Djawa Atau Primbon Keris	Kie Fadlan	推定	Golek Mas	ジャワ語 (ラテン文字)
	69	Seri: Kebatinan Baboning Kitab Primbon	—	推定	Kangaroo	ジャワ語 (ラテン文字)
	70	Primbon Sabta Pandita: Primbon Para Ahli Nujum	R. Tanojo	推定	Trimurti	ジャワ語 (ラテン文字)
	71	Primbon Djawa Bakti Djamal	—	推定	Sadu-Budi	ジャワ語 (ラテン文字)
	72	Primbon Japa Mantra	Aji Margono	推定	Giri Surya	ジャワ語 (ラテン文字)
	73	Primbon Djawa Bakti Djamal	R. Tanaya	推定	Sadu-Budi	ジャワ語 (ラテン文字)
	74	Primbon Adji Çaka: Almanak Pawukon 1000 Taun	R. Tanojo	推定	Trimurti	ジャワ語 (ラテン文字)
	75	Primbon Japa Mantra	Aji Margono	推定	Apollo	ジャワ語 (ラテン文字)

表 1 続き

時期区分	通し番号	タイトル	著者	発行年	出版社	言語
第 2 期	76	Primbon Djawa Sasmito Gaib	R. Tanojo	推定	S. Mulija	ジャワ語 (ラテン文字)
	77	Primbon Sandi Sasmita: Horoskop Dan Primbon Wanita	—	推定	Apollo	インドネシア/ムラユ語
第 3 期	78	Primbon Maha Pujangga	Embah Wongsorejo	1980	Naga	インドネシア/ムラユ語
	79	Kitab Primbon Betaljemur Adammakna	Kanjeng Pangeran Harya Tjakraningrat	1980	Soemodidjojo Mahadewa	ジャワ語 (ラテン文字)
	80	Primbon Jawa Sabda Guru	S. P. H. Handanamangkara	1982	Toko Buku Ks	ジャワ語 (ラテン文字)
	81	Kitab Primbon Atassadhur Adammakna	Ny. Siti Woeryan Soemadjah Noeradyo	1982	Soemodidjojo Mahadewa	ジャワ語 (ラテン文字)
	82	Kitab Primbon Bektijammal Adammakna Ayah Betaljemur	Ny. Siti Woeryan Soemadjah Noeradyo	1983	Soemodidjojo Mahadewa	ジャワ語 (ラテン文字)
	83	Primbon Wanita & Apa Kata Bintang Anda?	—	1984	—	インドネシア/ムラユ語
	84	Primbon Kelahiran Lengkap	Mbah Djoyo	1984	Karya Utama	インドネシア/ムラユ語
	85	Primbon Jawa Lengkap	Ibnu Syu'eb Al-Buary	1984	Toko Buku Mahakota	インドネシア/ムラユ語
	86	Primbon Pusaka Sakti	Musyaffa' Ruslan	1986	Bahagia	インドネシア語, アラビア語
	87	Primbon Rahasia Wanita	—	1988	Bintang Pelajar	インドネシア/ムラユ語
	88	Primbon Asia Lengkap	Effendie	1988	Dupa Jakarta	インドネシア/ムラユ語
	89	Primbon Wanita Lengkap	Ny. Chandra	1990	Anugerah	インドネシア/ムラユ語
	90	Primbon	Ny. Siti Woeryan Soemadjah Noeradyo	1990	Soemodidjojo Mahadewa	ジャワ語 (ラテン文字)
	91	Primbon Ajimantrawara Yogabrata Rajahyogamantra	Ny. Siti Woeryan Soemadjah Noeradyo	1990	Soemodidjojo Mahadewa	ジャワ語 (ラテン文字)
	92	Kitab Primbon Betaljemur Adammakna	Kanjeng Pangeran Harya Tjakraningrat	1990	Soemodidjojo Mahadewa	ジャワ語 (ラテン文字)
	93	Kitab Primbon Lukmanakim Adammakna	Ny. Siti Woeryan Soemadjah Noeradyo	1990	Soemodidjojo Mahadewa	ジャワ語 (ラテン文字)
	94	Kitab Primbon Atassadhur Adammakna	Ny. Siti Woeryan Soemadjah Noeradyo	1990	Soemodidjojo Mahadewa	ジャワ語 (ラテン文字)
	95	Kitab Primbon Qomarrulsyamsi Adammakna	Ir. Wibatsu Harianto Soembogo	1990	Soemodidjojo Mahadewa	ジャワ語 (ラテン文字)
	96	Primbon Wanita Lengkap & Horoscoop Berikut Ramuan Jamu-Jamu Tradisional	Beamar Dei	1991	Karya Ilmu	インドネシア/ムラユ語
	97	Kitab Primbon Betaljemur Adammakna	Kanjeng Pangeran Harya Tjakraningrat	1991	Soemodidjojo Mahadewa	ジャワ語 (ラテン文字)
	98	Kitab Primbon Betaljemur Adammakna	Kanjeng Pangeran Harya Tjakraningrat	1993	Soemodidjojo Mahadewa	ジャワ語 (ラテン文字)
	99	Kitab Primbon Betaljemur Adammakna Bahasa Indonesia	Ny. Siti Woeryan Soemadjah Noeradyo	1994	Soemodidjojo Mahadewa	インドネシア/ムラユ語
	100	Buku Primbon Jawi Lengkap: Edisi Bahasa Indonesia	Ki Sura	1999	Ud. Mayasari	インドネシア/ムラユ語
	101	Kitab Primbon Betaljemur Adammakna	Kanjeng Pangeran Harya Tjakraningrat	2001	Somodidjojo Mahadewa	ジャワ語 (ラテン文字)
	102	Primbon Mujaubat Kubro	K. Ageng Ismoyo	2001	Giri Utama	インドネシア語, アラビア語
	103	Primbon Empat Macam Petung	H. Djanudji	2002	Pt Trubus Agrisarana Surabaya	インドネシア/ムラユ語
	104	Primbon Lengkap & Tafsir Mimpi	Sunoto P. A.	2003	Galaxi (Bintang Pelajar Group)	インドネシア/ムラユ語
	105	Primbon Almanak 1900–2025	Putri Wong Kam Fu	2005	Putri Wong Kam Fu/ Hj. Leoni Fatimah	インドネシア/ムラユ語
	106	Kitab Primbon Jawa	Wignyoharjono	2005	Java Book	インドネシア/ムラユ語
	107	Kitab Primbon Lukmanakim Adammakna	Ny. Siti Woeryan Soemadjah Noeradyo	2005	Soemodidjojo Mahadewa	ジャワ語 (ラテン文字)

表 1 続き

時期区分	通し番号	タイトル	著者	発行年	出版社	言語
第 3 期	108	Kitab Primbon Betaljemur Adammakna	Ny. Siti Woeryan Soemadijah Noeradyo	2005	Soemodidjojo Mahadewa	ジャワ語 (ラテン文字)
	109	Primbon Jawa: Tentang Neptu, Wuku, Jodoh, Watak Dan Nasib Manusia	Ki Suryodijoyo	2006	Mashoer	インドネシア／ムラユ語
	110	Primbon Jawa Modern: Tips Jitu Meramal Nasib	Narendra Qamajaya	2008	Banyu Media	インドネシア／ムラユ語
	111	Primbon Masa Kini: Warisan Nenek Moyang Untuk Meraba Masa Depan	Romo Rds Ranoewidjojo	2009	Kawah Media	インドネシア／ムラユ語
	112	Primbon Wanita Lengkap	Ny. Sear Jadi Ningrum	2014	Aksara Press	インドネシア／ムラユ語
	113	Kitab Primbon Betaljemur Adammakna	—	2018	Soemodidjojo Mahadewa	ジャワ語 (ラテン文字)
	114	Primbon Ajimantrawara Yogabrata Rajahyogamantra	Ny. Siti Woeryan Soemadijah Noeradyo	2019	Soemodidjojo Mahadewa	ジャワ語 (ラテン文字)
	115	Kitab Primbon Jawa Sebagai Tetap Relevan Sepanjang Masa	R. Gunasmita	2021	Narasi	インドネシア／ムラユ語
	116	Kitab Primbon Betaljemur Adammakna Edisi Bahasa Indonesia	Kanjeng Pangeran Harya Tjakraningrat	2024	Narasi	インドネシア／ムラユ語
	117	Perimbon & Horoscope Lengkap	L. Chanifah A. G.	推定	Bintang Pelajar	インドネシア／ムラユ語
	118	Primbon Wanita Lengkap	Gayatri	推定	Dina	インドネシア／ムラユ語
	119	Primbon Lengkap Populer Khusus Wanita	Indri	推定	Mekar	インドネシア／ムラユ語
	120	Horoscoop Dan Primbon Wanita	Shati	推定	Karya Anda	インドネシア／ムラユ語
	121	Primbon Lengkap Kelahiran Dan Kehidupan	A. Broto	推定	Mekar	インドネシア／ムラユ語
	122	Primbon Lengkap Untuk Wanita	Hesti	推定	Mekar	インドネシア／ムラユ語
	123	Primbon Wanita Dan Horoscope	Ki Weka	推定	Bintang Usaha Jaya	インドネシア／ムラユ語
	124	Buku Primbon Jawi Jangkep	Ki Sura	推定	Ud. Mayasari	ジャワ語 (ラテン文字)
	125	Primbon Lengkap	Ki Soenaryo	推定	Global Mandiri	インドネシア／ムラユ語
	126	Primbon Lengkap Pira & Wanita	Titis Asmarandana	推定	Media Pustaka	インドネシア／ムラユ語
	127	Kitab Primbon Atassadhur Adammakna	Ny. Siti Woeryan Soemadijah Noeradyo	推定	Soemodidjojo Mahadewa	ジャワ語 (ラテン文字)
	128	Primbon Mjarobat Kubro: Peninggalan Para Leluhur	Laib M. Z. & Maftuh Ahnan	推定	Bintang Usaha Jaya	インドネシア語, アラビア語
	129	Primbon Mjarobat Kubro	Ust. Gibran Maulana	推定	Dua Media	インドネシア語, アラビア語
	130	Kitab Primbon Betaljemur Adammakna	Kanjeng Pangeran Harya Tjakraningrat	推定	Soemodidjojo Mahadewa	ジャワ語 (ラテン文字)
	131	Primbon Pria Dan Wanita Lengkap	Titis Asmarandana	推定	Dua Media	インドネシア／ムラユ語
	132	Primbon Sabdo Pandito: Bahasa Indonesia	R. Tanojo	推定	Karya Utama	インドネシア／ムラユ語

を出版していた（表1中2番・3番・5番・7番・9番）。タン・クン・スウィの出版社から出されたプリンボンは、ジャワ文字あるいはラテン文字のジャワ語で印刷されたものがほとんどで、プリンボンは人々の関心を集める大衆⁹⁾向けの出版物として人気だったようである [Wisnu 2023: 11, 134]。タン・クン・スウィは、インドネシア中の多くの出版社、書店、商店と提携して出版物のやり取りを行っており、特に1950年代は後述するウォン・カム・フーの出版社チュルミン (Tjermin) の他、スラバヤのトリムルティ (Trimurti, 表1中65番・70番・74番)、スマランのケン (Keng, 表1中19番・21番・24番・26番・39番・40番)、スラカルタのサドゥ・ブディ (Sadu-Budi, 表1中13番・17番・27番・34番・45番・53番・63番・71番・73番) などのプリンボンを出版している複数の出版社と取引を行っていた [ibid.: 215]。これらからは、タン・クン・スウィの出版社を起点にプリンボンの出版が展開していったことも考えられる。

また1939年には、スモディジョヨ・マハデワ社 (Soemodidjojo Mahadewa) からベタルジェムル・アダムマクナ (Betaltjemur Adammakna) シリーズのプリンボンの初版が出版された [宮崎 1983: 134, 140]。このプリンボンはその後毎年のように版が重ねられており、2000年代以降頻度は減っているものの、最新版は2018年版まで確認できている (表1中52番・54番・55番・79番・82番・92番・97番・98番・99番・101番・108番・113番・130番)。著者には、貴族の称号を冠したジョグジャカルタの宮廷関係者の名前が挙がっており、人々からの評価が高いロングセラーのプリンボンである。タン・クン・スウィの出版社に続き、こうしたジャワ人によるプリンボンもこの頃から出現し始める。

こうしたインドネシア独立以前から独立直後までの、プリンボンの出版の黎明期を第1期とすると、この時期のプリンボンの出版の背景には、オランダ植民地政府による出版統制の影響が大きい。1910年代後半～1920年代には、植民地政府が運営する公立出版社バライ・プスタカが「健全な」ムラユ語の出版物を普及させる政治的目的で設立され、その出版界における覇権が確立していた [山本 2002: 170–171]。さらに1920年代初頭には、植民地政府によってその

9) 20世紀前半におけるプリンボンなどの娯楽出版物の読者層に関しては、情報が少なく断言できないが、独立以降と比べるとかなり限定されていたと考えられる。19世紀末から20世紀初頭にムラユ語で出版された年鑑アルマナックの場合、その内容や懸賞当選者から、インドネシア人下級官吏や書記、教育関係者や公務員、郡や村落レベルの役人、王家の関係者、華人系商店主が読者であったと推定されている [土屋 1992: 122, 130, 148–152]。タン・クン・スウィの出版社からは、ジャワ文字あるいはラテン文字のジャワ語が大部分を占め、それに続いてムラユ語の出版物も増加した [Wisnu 2023: 135]。これらから、当時のプリンボンの読者は、出版や報道に関わる同業者に加え、ジャワ人役人、王家の関係者、教育関係者などのリテラシーが必要とされたジャワ人、ジャワ語やムラユ語を使用していた華人などに読まれていたと推定することができる。また、ジャワの文学作品はオランダ人による研究の対象ともなっていたが、こうした非学術的な背景での私営の出版物は「真剣に」取り扱うべき対象とはみなされていなかったようである [Florida 1995: 29]。そのため、オランダ人が学術的、政治的関心などから読んだとは考えにくい。

統治を脅かす内容の出版物が厳しく取り締まられていた [同上書：169–170]。こうした状況の中で、タン・クン・スウィも、政治的な匂いのしない文化や社会に関する知識を提供することで、公立出版社と市場を差別化するとともに検閲を避け、一般大衆に向けて出版業を展開しようとしていた [Wisnu 2023: 82–83]。こうした状況の中でプリンボンの出版が始まったと考えられる。第1期において、プリンボンは出版統制を逃れ、公立出版社と市場を差別化する娯楽出版の一角を担っていたと考えることができる。

独立以降の1950年代～1970年代は、表1が示すように多くのプリンボンが出版されており、プリンボンの出版が一気に拡大したと考えられる。そこでこの時期を第2期とする。表1の書誌情報を見る限り、この頃には華人の出版社もジャワ人の出版社もかなり増加していたと考えられる。特に、先述のタン・クン・スウィと関わりのあったジャワ島内各地の出版社や、スモディジョヨ・マハデワ社など、現在に至るまで高く評価され続けているプリンボンが多く見られる。この時期のプリンボンの多くはラテン文字のジャワ語で印刷されており、タイトルにはジャワの予言者の名前、「ジャワ」(Jawa)、「真の」(sejati)、「聖人」(pandhita)など、ジャワや神秘性、伝統を強調する語彙が多く用いられている。

この背景には、当時の人々のジャワ神秘主義 (クジャウエン *kejawen*, クバティナン *kebatinan*) への関心が関わっていると考えられる。独立後のインドネシア政府は、政府公認の宗教アガマ (Agama) を制定し、スハルト政権下では、IDカードへの記入を通じて、公認宗教であるイスラーム、カトリック、プロテスタント、仏教、ヒンドゥー教のいずれかへの帰属を明確にすることが求められた。公認宗教化が進む中で、そこから逸脱するジャワ神秘主義の組織の多くが解散や禁止の処分を受け、ジャワ神秘主義の公認宗教に対する位置付けをめぐる政治的な闘争が行われていた。それは単に政治的な動きとしてだけでなく、人々の意識においても広がっていた。1970年代～1980年代にジャワの神秘主義的实践を調査していた関本は、ジャワで神秘主義的实践を指すクバティナンがジャワ人の文化を代表するようなものとして意識化されるようになり、1980年代当時までの30年間でとりわけ顕著になったと述べている [関本 1986: 385]。最終的にジャワ神秘主義は、宗教ではなく文化や慣習の意味合いを強めた「信仰」(kepercayaan) という位置付けが創出されることとなった [福島 2002]。そうした当時の社会状況や人々の関心を反映しているかのように、1950年代～1980年頃のプリンボンは、ジャワ神秘主義やジャワの伝統であることが強調されているのである。そのため、第2期のプリンボンは、ジャワ神秘主義やジャワの伝統的な知識を伝える書物であったと考えられる。

1980年代以降では、プリンボンの傾向にいくつかの変化が見られる。この時期から、これまでジャワ語が主流であったプリンボンが、インドネシア語で書かれることの方が多くなる。それに伴いタイトルにも変化が見られ、「女性」(wanita)、「誕生」(kelahiran)、「ホロスコープ」(horoskop)、「完全版」(lengkap) といったそれまでにはあまり用いられなかった語彙が頻出す

る。内容もそれに対応しており、女性特有の月経・妊娠・出産に特化した内容であったり、ジャワの占術だけでなく西洋占星術の十二星座が用いられていたりする。こうした傾向の変化から1980年代以降を第3期とすることができる。この第3期において、プリンボンは女性も読者として想定されるようになるなど大衆化し、ジャワに限らず、科学に対する諸文明の「伝統」に属する占術知識全般を掲載しうるものとして位置付けられる。

ここまで述べてきた通り、プリンボンには、出版統制を逃れる娯楽出版として展開した第1期（1930年代～1950年代初頭）、ジャワ神秘主義に対する関心の高まりを支えた第2期（1950年代～1970年代）、ジャワに限らず諸文明における「伝統的知識」として提示され、より幅広い層向けに大衆化された第3期（1980年代以降）という3つの時期がある。このように、プリンボンは時代によって、扱われる知識やその提示の仕方に大きな変化が見られる。プリンボンの出版を行う知識人にとって、プリンボンはジャワの伝統的な知識の集成という固定的なものではなく、社会状況や読者の関心に対応する柔軟な媒体なのである。

ウォン・カム・フーは、第1期を支えたタン・クン・スウィの書店と業務提携しており、第2期の1950年代～1970年代に様々なプリンボンを出版し、そのプリンボンの特徴は第3期のプリンボンを先取りするものであった。3つの時期のプリンボン出版に関係し、その変化を支えてきた人物として、ウォン・カム・フーは20世紀のプリンボン出版を象徴する非常に重要な存在である。彼のプリンボンの出版の展開とその社会的背景を追うことで、時代の影響を受けながら展開するプリンボンの出版過程を考察することができる。それでは、ウォン・カム・フーがどのようにプリンボンの出版に携わり、どのようなプリンボンを出版したのか、続く第IV章、第V章で検討する。

IV 知識人としてのウォン・カム・フー——ジャーナリストから占星術家へ

ウォン・カム・フー（写真1）は、ジャーナリスト、出版業者、占星術家、経営者など多岐にわたって活躍した男性である。その中でも占星術家としての評判は高く、1970年代～1980年代には、インドネシア語週刊誌 *Tempo* で複数回取り上げられている〔Anonymous 1971; 1975; 1985〕。さらに、定期刊行物の占いコラムには彼が執筆したものも多数存在する。1979年には、ウォン・カム・フーの80歳を記念した本『*Pelita Hidup*』（人生のとしび¹⁰⁾）も出版され、彼

10) 『*Pelita Hidup*』というタイトルのこの本は、ウォン・カム・フーの人生を紹介し、彼の生き方を若者の模範として欲しいという意図で書かれたものである。著者のマルチコ（Moerthiko, 1929–没年不明）は、1976年から発行時点1979年現在までウォン・カム・フーの出版社から本の出版を行っている〔Sekretariat Empeh Wong Kam Fu 1979: 573〕。ウォン・カム・フーと少なくとも3年の交流がある人物によって執筆され、ウォン・カム・フー自身によって出版されたこの本の記述は、自伝に近い評価ができるものと考えられる。



写真1 ウォン・カム・フー
(プトリ・ウォン・カム・フー提供)

の80年間の人生が118ページにわたって述べられている [Moerthiko 1979]。本章では、こうしたウォン・カム・フーに関する文献資料と、彼の孫娘で後継者のプトリ・ウォン・カム・フー (Putri Wong Kam Fu, 1953-) らへのインタビュー¹¹⁾ から、彼がどのような時代を生きてきたのか、そして彼がどのようにプリンボンの出版に関わったのかを明らかにする。

ウォン・カム・フーは、本名をペツ・パン・エン (Pek Pang Eng 白邦英) と言う。ウォン・カム・フーという名前は占星術家としての活動名である。彼は1898年11月27日、東ジャワ州グレシック県で一人っ子として生まれた。彼の父はグレシックの華人¹²⁾ で、綿布、砂糖、コーヒーを販売する商店を営んでいた。父のビジネスは順調で、福建省厦門から親族を呼び寄せて人員を補完することもあった [ibid.: 474, 479]。

- 11) プトリ・ウォン・カム・フーへのインタビューは、2023年9月9日～10日に、東ジャワ州のカウイ山にある彼女の自宅兼職場で行った。1泊2日の中で筆者と彼女は一対一で話をした。まず、筆者の運勢に関する占い(100万ルピア、相場に比べてかなり高額である)を依頼し、その後占いの方法やウォン・カム・フーの人生に関して教えてもらった。彼女が保管していたウォン・カム・フーの出版物や写真などの資料も見せてもらい、一部譲り受けた。また、彼女の勧めで、隣に住む彼女の次男家族の家や、近くにある聖人廟 (Pesarean Gunung Kawi) も訪ねた。加えて、ウォン・カム・フーの孫の一人であるリン・シュウ (Lin Chew) と連絡を取り、ウォン・カム・フーに関することを教えてもらった。
- 12) 原文ではトトツ (totok) である [Moerthiko 1979: 474]。トトツは、インドネシアの華人のうち、19世紀以降に渡来した人々で、それ以前に渡来して現地人との混血が進んだプラナカンと対比して用いられる言葉である。主に出生地や母語などの文化的特性で区別される [貞好 2016: 18–20]。ペツ・パン・エンの父は、比較的渡来して世代の浅い華人であると考えられるが、ペツ・パン・エン自身がトトツなのかプラナカンなのかは定かではない。本論文の議論においてはこの区別は重要ではないため、単に華人としている。

ペッ・パン・エンは、幼少期から非常に読書熱心な人物であった。彼が読書好きであることは、プトリ・ウォン・カム・フーも語っており、彼は「朝から夜までずっと机に向かって、読み書きをしつつ、毎日訪ねてくる客に対応していた」そうである。週刊誌記事によれば、彼が読んでいたのは中国古典の物語だったという [Anonymous 1975: 46]。実際 19 世紀末～20 世紀初頭に、華人によって中国古典のムラユ語訳が刊行、シリーズ化され始め、1920 年代頃には定期購読型の大衆小説として絶大な人気を持つようになっていた [山本 2002: 183]。こうした当時の時代背景から、ペッ・パン・エンの幼少期にはムラユ語訳の中国古典が身近な存在であったと考えられる。¹³⁾

1908 年、ペッ・パン・エンは七年制のオランダ語華人学校 (Hollandsche Chineesche School) に入学する。貞好康志によれば、1908 年、オランダ政庁が「中国志向」の政治的運動の温床になっていた中華学堂¹⁴⁾に対抗する目的で、このオランダ式学校を設立した [貞好 2016: 55]。しかし、当時既に 9 歳だった彼は、厳格な年齢制限により入学後すぐ除籍となり、代わりに中華学堂に通うこととなった [Moerthiko 1979: 475–477]。1913 年に中華学堂を卒業しているが、七年制学校ではなかったために、その後の進学の手がかりが絶たれたペッ・パン・エンには、小学校中退という思いが強く残ったようである。雑誌のインタビュー記事では、学歴について回答する際に、中華学堂に通っていたことは言及せず、「学歴は七年制のオランダ語華人学校 (小学校) で、それすらも終了していない」と答えていた [Anonymous 1975: 46]。

ペッ・パン・エンは、10 代の終わり頃からジャーナリストとして活動し始める。彼は、インドネシア内外を飛び回りながら、多くの華人系ムラユ語定期刊行物での記事の執筆、編集、発行に関わっていた。*Tempo* 1975 年 6 月 21 日号をもとに、彼が関わった日刊紙、週刊誌などの定期刊行物をまとめると以下の通りである (表 2)。

彼は、スラバヤの日刊紙 *Tjhoen Tjhoe* の記者としてキャリアをスタートさせ、その後複数の定期刊行物に関わった。表 2 の定期刊行物に関わる傍ら、1924 年には中華記者同盟 (Persatuan Wartawan Tionghoa Tjoe Pit Hwee) の代表になり、香港、澳門、汕頭、厦門、上海を訪れることもあった [*ibid.*]。その他にもマレーシア全土を視察したり、シンガポールで商業雑誌を出版したり、香港で貿易会社取締役になったりしていた。こうした経歴や表 2 で示した出版物の出版地からは、ペッ・パン・エンは 1910 年代末～1930 年代前半にかけてジャワ島内外の主要な港市を渡り歩き、主にジャーナリストとして精力的に活動していたことがわかる。

13) ウォン・カム・フーは、出版に用いていた言語から、少なくともジャワ語、インドネシア語 (ムラユ語)、英語を用いることができたと考えられる。中華学堂に通っていたため華語を用いることができたことと推測されるが、華語での出版物は管見の限り無い。オランダ語は習うことができなかったため、用いることができなかったとされている [Moerthiko 1979: 477]。

14) 中華学堂 (Tiong Hoa Hak Tong) は、中華会館が運営する六年制の初等教育校であり、華語教育などが行われていた [貞好 2016: 51–52]。

表2 ペット・パン・エン（後のウォン・カム・フー）が携わった定期刊行物

西暦	タイトル	出版地
1917	<i>Tjhoen Tjhoe</i>	スラバヤ
1918–19	<i>The Young Republication</i> <i>Tionghoa Gwat Po</i>	スラバヤ グレシック
1924	<i>Hoa Po</i>	グレシック
1926	<i>Doenia Baroe</i> <i>Unitas</i> <i>Soeara Baroe</i>	メダン 不明 スマラン
1927	<i>Perdagangan</i>	シンガポール
1932–35	<i>Import & Export Bulletin</i>	香港
	<i>Academia Bibliothek</i>	香港
	<i>Pewarta Soerabaia</i>	スラバヤ
	<i>Sin Jit Po</i>	スラバヤ
	<i>Suara Semarang</i>	スマラン
	<i>Jawa Tengah</i>	スマラン
	<i>Keng Po</i>	ジャカルタ
	<i>Siang Po</i>	ジャカルタ
	<i>Sin Po</i>	ジャカルタ

出所：[Anonymous 1975] をもとに筆者作成

1930年代になると、世界的な不況やオランダ植民地政府による報道統制により、ペット・パン・エンのジャーナリストとしての活動は厳しい状況に置かれることとなった。1931年～1942年の間、彼は香港に滞在していた。彼が香港に滞在することとなった経緯について、プトリ・ウォン・カム・フーは、ジャーナリストとしての活動中にオランダの植民地支配に抵抗したとして国外追放され、妻と6人の子供を連れて香港へ逃げたのだとインタビューで語った。

実際、1920年代～1930年代は、ナショナリズムに関する定期刊行物が東インド政府の秩序を脅かすものとされ、多くのジャーナリスト兼ナショナリストが投獄や罰金刑を受け、刊行物、出版社、印刷所までもが厳しい監視下に置かれていた [山本 2002]。特に、1931年には植民地政府によって報道統制令（*Persbreidel Ordonnantie*）が発布された。この報道統制令は、平和を乱すとみなされる出版物を発禁にする権利を総督に与え、規制に反した出版社の印刷活動を8日間以上禁止にする内容であった [Wisnu 2023: 44]。ウォン・カム・フーの伝記では、国外追放されたという記述はないものの、当時、オランダ政府の監視下で出版や報道活動を自由に行えず、ジャワ島外へ出たと説明されている [Moerthiko 1979: 484, 490, 492]。国外追放処分を受けたのか、あるいは自由な出版活動ができずに自発的に出国したのかは定かではないが、ペット・パン・エンはこうした状況の中でインドネシアを去り、事態が落ち着くまで香港に滞在

し、そこから出版や記事の執筆に関わっていたと想定される。そのため、表2の中で1932年～1935年に出版された定期刊行物に関しては、詳細は定かではないものの、ペッ・パン・エンが香港にいる状態で記事を送るなどしていたと考えられる。

ペッ・パン・エンは、香港からインドネシア向けの出版に関わる一方で、香港の2人の占星術家チョッ・パツ・カン (Tjot Pat Khan) とマツ・ベン・フウェ (Mak Beng Hwe) に弟子入りして占術を学ぶようになる。プトリ・ウォン・カム・フーによれば、彼が学んだ占術は「八字」¹⁵⁾ だと言う。これは、陰陽五行説に基づいており、生まれた年、月、日、時間をそれぞれ干支の2文字に置き換え、合計8つの文字で表すことでその人の運勢を見るものである。*Tempo* 1975年6月21日号においても、「学んだのは主に、生年月日に基づいて運勢を占うこと」とされている [Anonymous 1975: 46]。

ペッ・パン・エンは、1930年代の世界的な不況の波を受ける中で、香港の占星術家から学んだ占術である八字の知識を出版にも活かすことになる。1935年のインドネシアは不景気に見舞われ、彼が香港から記事を書いていた *Pewarta Soerabaia* も彼に対して原稿料の支払いができない状態になっていた。そこで彼は、原稿料の代わりに自分の占いの広告を掲載するように交渉した。その結果、「生年月日を記入して郵便為替10ギルダー¹⁶⁾を郵送すると、すぐに重要なアドバイス10個が書かれた自分の運命に関するホロスコープが封書で届きます。占星術家ウォン・カム・フー」という広告を掲載してもらうことになった。この広告の効果は、本来もらうはずだった原稿料よりも高い収益が得られたほどである [ibid.]。出版物への広告により占いの顧客を獲得し、その占いが原稿料の代替となる収益をもたらすという出版と占いの相乗効果が、その後の彼の活動の礎となった。それまで本名ペッ・パン・エンとしての執筆活動が主であったが、この頃から占星術家ウォン・カム・フーと言う名前での活動も増えていくことになる。

1942年頃、ウォン・カム・フーは香港からインドネシアに帰国する。帰国の経緯について、*Tempo* 1971年3月27日号では、太平洋戦争の直前に「運勢は南にある」と香港の占星術の師匠に占われ、それを受けて帰国したと説明されている [Anonymous 1971: 39]。一方『*Pelita Hidup*』では、1938年～1941年頃はヨーロッパでの戦争の影響がアジアでも感じられており、その危機感の中で、ちょうど真珠湾攻撃があった1941年12月8日に香港を出港したと記されている [Moerthiko 1979: 509-510]。出港してからもいくつかの港を経由し、南下する日本軍の爆撃と、ウォン・カム・フーの逮捕を図るオランダ政府の監視を逃れながら、スラバヤに辿り着き、しばらく友人に匿ってもらっていた [ibid.: 510-514]。

15) 日本では四柱推命として知られている。プトリ・ウォン・カム・フーによれば、中国語では Pak Ce, 福建語では Pek Ji という。

16) 10ギルダー (F10) は、当時の為替レートで20香港ドルに値した [Anonymous 1975: 46]。

1942年～1945年の日本軍政期も彼は危うい立場にあった。『*Pelita Hidup*』では次のように述べられている。ペツ・パン・エンは、英語が話せることを日本軍に評価され、現地の人々への情報伝達に言語的な障壁があった日本軍の非公式通訳となって、給料の代わりにタバコや食糧をもらいながら働いていた。しかし、彼と共同で会社を経営していた友人がその会社の独占を企んだことで、反日団体の成員であると虚偽の密告をされ、彼は、香港から帰国したばかりということもあって、日本軍に勾留されることになった。12日間の厳しい取り調べを受けていたが、ある憲兵隊長の判断によって釈放された。釈放後、彼は記者時代の友人の後ろ盾を得て商会を再設立した。しかし、再逮捕の恐れや憲兵隊からの協力要請を回避するため、同会を解散せざるを得ず、ジャカルタへ移って終戦を迎えた [ibid.: 515-519]。

ウォン・カム・フーは、インドネシア独立後の1940年代後半には記事の執筆や雑誌の出版などジャーナリストとしての活動を再開し、1950年代にかけて順調にその規模を拡大していった。1945年には書籍『*Djojobojo*』（ジョヨボヨ）¹⁷⁾を出版し、その他複数の定期刊行物の記者や編集長も務めていた。1949年には、スラバヤで自身の書店兼出版社チュルミンを設立し、そこから週刊誌 *Tjermin* (明鏡),¹⁸⁾ *New Look*, *Bintang Soerabaia*, *Paris*, *Indah* を出版した [Anonymous 1975: 46-47]。チュルミンからは雑誌の他にも、占術書やプリンボンが多く出版されたとあり [ibid.: 47]、プリンボンの出版はこの頃から始まったと推測される。ウォン・カム・フーは、自身が設立した出版社の名前にも、そこから自身が出版した週刊誌の名前にも、インドネシア語で鏡を表す *tjermin* (チュルミン) という言葉を用いている。伝記においても、雑誌のインタビューにおいてもこの言葉に関する明確な説明はみられないが、チュルミンが彼にとって非常に重要な意味を持っていたと考えられ、彼が中心となった出版活動を象徴する名前になっている。

出版社チュルミンは、当初400ルピアだった資金が250万ルピアに増え、彼の下で働く25人の記者全員が自動車を持つことができるほどの成功であった [ibid.]。このウォン・カム・フーの出版業の成功は、彼の経営の手腕や占星術の評判によるものだけではない。彼がそれまでのジャーナリストや出版社としてのキャリアの中で築き上げた人脈も重要であった。出版社チュ

17) タイトルのジョヨボヨは、11世紀半ばのクディリ朝の王の名前であり、宮廷詩人ロンゴワルシトによって編纂されたとされる予言書が知られている。関本は1978年のフィールドワークで様々な版の「ジョヨボヨ予言書」が書籍行商人によって定期市で一般向けに売られていたことを記している [関本1982: 498-499]。また同タイトルの書籍は第III章で言及したタン・クン・スウィも出版しており、その予言の内容を扱っている。実際の書籍は未確認であるが、後述する1947年初版の同タイトルのプリンボン（表1中43番）や当時の流行を踏まえると、ジョヨボヨの予言を大衆向けに説明した内容であると推察される。

18) この週刊誌 *Tjermin* の1952年11月1日号（4年目第109号）（ジョグジャ・ライブラリー・センターのデジタルアーカイブより）などを見ると、タイトルの横に漢字で「明鏡」と書かれている。しかし、1953年6月27日号からこの雑誌タイトルの漢字表記は消え、ラテン文字のみで表記されるようになった。

ルミンと他の出版社はプリンボンなど類似した出版物があっても競合関係ではなく協力関係にあり、お互いの本を取引しあったり、広告を出しあったりしていた。特に、先述のプリンボン出版の第1期を支えたタン・クン・スウィの出版社と頻繁に取引があったことが確認できる [Wisnu 2023: 177–178, 215, 228]。こうした出版や流通のネットワークにより、1950年代は出版業全体が興隆しており、プリンボンの出版も一気に増加したと考えられる。表1を見ても、1950年代以降になると確認できた冊数が一気に増加している。その中には、ウォン・カム・フーが関わったものも2冊確認できている。それだけではなく、当時のプリンボンは好評により何度も増刷されていることが本の巻頭に示されており、次章で説明する通り1960年代に出版されたプリンボンのいくつかはこの時期に出版されたプリンボンの再版となっている。1950年代に入り、プリンボンやウォン・カム・フーの出版物は全盛期を迎えていたのである。

しかし、その好況も長くは続かない。ウォン・カム・フーの出版も当時の政情に巻き込まれ、困難に陥ったためである。1959年～1965年のインドネシアではナサコム体制¹⁹⁾が敷かれ、その中でスカルノの庇護下に置かれたインドネシア共産党(PKI)と国軍の対立が拡大していた。貞好によれば、この時期は華人社会も一枚岩ではなく、同化をめぐる論争の中で複数の立場に分かれており、とりわけ1960年代には、差別や暴動への恐れから華人の権利保護を重視する立場と、華人固有の利害の存在を否定し、より徹底した同化を志向する立場の対立に至っていた。この対立がPKI対国軍の対立と結びつき、前者の立場はPKIと、後者の立場は反PKIの国軍と関係を深めていた [貞好 2016: 140–198]。

こうしたナサコム体制下では、PKIと結びつきを強めていたスカルノ政府によって出版統制が厳しくなされていた。特に1960年以降は、出版許可においてマニボル (Manipol)²⁰⁾を掲載必須とする法令や華語での出版を禁じる法令があり、反PKIとみなされた新聞は閉鎖された [Tribuana Said 1988: 122–126, 139–141]。そのため、スカルノやPKIと結びついた立場を取らない人々にとって、出版は難しくなっていた。例えば、華人の同化論争において同化派の立場から論争を主宰したオヨンが主筆の雑誌は、1961年にスカルノ政府によって停刊に追い込まれたとしている [貞好 2016: 193]。

ウォン・カム・フーは当時の状況について、*Tempo* 1975年6月21日号の中で以下のように語っている。ナサコム体制期、彼は編集者にマニボルを掲載しないように指示しており、*Tjerman* は娯楽誌であって政治誌ではないと強調していた。そうした中、スラバヤ情報局員にもPKIが増加していた1962年、出版ライセンス取り消しの通告を受けた。彼はジャカルタの

19) 指導される民主主義体制を目指したスカルノは、乱立する諸勢力を民族主義、宗教、共産主義の3政党に統一し、この三大勢力間の均衡を図った。この体制は、ナショナリズム (Nasionalisme)、宗教 (Agama)、共産主義 (Komunisme) の頭文字を取ってナサコム (Nasakom) と呼ばれた。

20) マニボルとは、Manifesto Politik の略称で、1959年8月17日の独立記念演説でスカルノが提示した政治スローガンを指す。

情報省にまで赴いて理由を尋ねたが回答は得られず、結局1966年のPKI解散まで出版を行えなくなった。その結果、彼は破産してしまったということである [Anonymous 1975: 47]。管見の限りウォン・カム・フーは自身の政治的立場について明らかにしておらず、出版ライセンス取り消しの理由については彼自身にも知る術が無かったため、PKIとの関連の有無を含め、実際の経緯は不明である。ただし、出版ライセンスが取り消されていた1962年～1965年という期間を踏まえると、ウォン・カム・フーの出版活動は、ナサコム体制下の華人をも取り込んだ対立に巻き込まれ、停止された可能性が高い。

実際、この時期のプリンボンには、新しいタイトルのものがなく、再版の3冊のみである。この結果、1950年代末から1960年代にかけて、ウォン・カム・フーの出版業は好況から一転、かなり厳しい状況に追いやられた。

1965年の九・三〇事件²¹⁾を発端に、スカルノが失脚、PKIは大量虐殺によって壊滅状態となり、代わって国軍のスハルトが実権を握った。これによって、国軍側と結びついていた徹底した同化を志向する立場の華人が主導的になった。それに加え、PKIと中国共産党の関係が疑われたことで、中国との関係が悪化し、それが華人に対する暴動へと至り、華語の使用禁止といった徹底的な同化が社会から要求されるに至った。結果としてスハルト体制下では、経済活動を保証する代わりに、同化を徹底するという華人政策が打ち出された [貞好 2016: 198-217]。この九・三〇事件による政情の転換を受け、1966年にウォン・カム・フーの出版ライセンスは回復する。

出版ライセンスは回復したものの、当時既に破産しており、11人の子や孫を育てていたウォン・カム・フーが出版業を再開させるのは至難の業であった。しかし、その状況でも彼の出版を可能にしたのは、彼の占いの評判の高さと、これまで築いてきた同業者のネットワークである。それは資金無しで1万部の雑誌の出版を可能にするほどであった。*Tempo* 1971年3月27日号では、当時の出版を支えたものとして、他社の責任者から記事の刷版を貸してもらえようような良好な関係があったこと、国営数字くじナロ (Nalo)²²⁾の当選番号を当てられると評判だった彼の雑誌に多数の友人が広告を出したことが述べられている [Anonymous 1971: 40]。ここからは、彼が出版関係者と良好な関係を築いていたこと、またくじを当てるための占いが人々の関心を多く集めていたことがわかる。

21) 1965年9月30日の深夜から翌朝にかけて、大統領親衛隊が陸軍将軍の家を襲い、その場に居合わせた中尉なども含めて射殺あるいは拉致後殺害したクーデター未遂事件 [倉沢 2014: v-viii]。

22) ナロは国営くじ *Nasional Lotre* の略称。1960年代～1970年代の経済的、政治的な危機に際し、政府収入を増やす目的で、ジャカルタで一時実施されていた。1969年頃に調査を行ったニールス・ミュルダーも、人々がナロの当選番号を当てることのできるというジャワ神秘主義指導者の元に集まる様子を記述しており、当時多くの人が数字くじに熱中していたこと、その当選番号を当てることができるとする人物に高い関心が寄せられていたことがわかる [Mulder 1998: 37-42]。

そうしてウォン・カム・フーの出版業は再開し、その占いの評判もますます上がっていった。特に、1970年代から彼が亡くなる1984年頃までは、彼の占いは少なくともジャワでは広く知られており、本章冒頭で紹介したような週刊誌の取材に至っている。加えて、いくつかの雑誌の占いコーナーも手がけるようになった。例えば、ジャワ語週刊誌 *Panjebar Semangat*²³⁾ の1982年7月3日号～1985年1月26日号では、ウォン・カム・フーが「ASTROLOGI」（占星術）というコーナーを毎号ジャワ語で執筆していた。²⁴⁾ このコーナーでは、1週間の運勢が十二星座に基づいて占われており、各星座50語程の分量で書かれている。ジャワ語読者に向けられた歴史ある雑誌で連載を持っていることから、彼の占いが単に華人の間だけでなく、ジャワ語話者全般に広く受け入れられていたことがわかる。

この頃彼は、ウォン・カム・フーという名前以外に、(ウ)ンバ・ウォンソルジョ (Mbah/ Embah Wongsoredjo) という名前を使うこともあった。このジャワ風の名前を使い始めた正確な年は定かではないが、「現在名前をンバ・ウォンソルジョに変えた」と1971年の週刊誌記事に書かれているため [*ibid.*: 39]、少なくとも1970年以降はこの名前を使用していたと考えられる。華人の改名に関しては、1965年の九・三〇事件以降華人の同化圧力が高まる中で、改名が急激に増加した [真好 2016: 121]。そのため、この名前の使用には華人に対して同化の圧力がかかっていた時代背景が関係していると考えられる。しかし、それだけではなく、この名前によって占星術家としての呪術的な力をジャワ人に示そうとした可能性もある。「ンバ・ウォンソルジョ」という名前のンバ (Mbah) というのは、祖父や祖母を示すジャワ語シンバ (simbah) が転じて、豊富な知識や経験を有する高齢者への敬称として用いられる言葉である [土屋 1983: 132]。ンバは、特に呪医ドゥクンや呪術的知識に詳しいとされる高齢者に用いられる。このンバを使った名前にすることで、ジャワ人読者に、著者が既に高齢で、ドゥクンのような呪術的な力を持った経験豊富な人物であるという印象を持たせることができる。²⁵⁾ ただし、完全に改名されたわけではなく、1970年代以降もウォン・カム・フーという名前は継続して用いられている。

ウォン・カム・フーは、1984年12月31日、東ジャワ州マラン県パトゥ（当時）の自宅にて、86歳で亡くなった。彼は晩年でも精力的に活動を続けており、*Panjebar Semangat* にて1985年

23) 民族主義団体ブディ・ウトモの創設者ストモが自身の考えをジャワ語読者にも伝えるため、1933年にスラバヤで創刊した雑誌。2023年に創刊90周年を迎え、現在でも刊行が続いている歴史ある雑誌である。

24) ウォン・カム・フーは亡くなる直前まで記事の執筆を続け、死後1985年2月2日号以降は後継者ブトリ・ウォン・カム・フーがこの記事の執筆を引き継いだ。このコーナーは、2020年9月19日号まで連載された。

25) こうしたンバという敬称の利用は、ウォン・カム・フーの場合に限らず、ジャワ社会において広く見られる。例えば、1963年のバ・スロ事件に関する土屋の論考は、ドゥクンとして振る舞うようになった人物がバ・スロと名乗り始めたことを説明している [土屋 1983: 121]。

1月号まで彼の名前で占いの連載が続いていたことから、亡くなる直前まで執筆を続けていたと考えられる。彼の訃報は *Tempo* 1985年1月12日号でも取り上げられ、「9つの出版に携わった占い師」として、彼の占い師としての略歴とプトリ・ウォン・カム・フー²⁶⁾ が後継となることが報じられた [Anonymous 1985: 15–16]。

ウォン・カム・フーは、ジャワ生まれの華人として、複数の地域を行き来し、様々な職業を経験し、複数の名前を使いながら、様々な危機にも屈せず出版に関わってきた。彼の出版活動は、ジャーナリストとして独立を主張する活動とそれによる出版統制など、先行研究で取り上げられていたナショナリストらと共通する特徴を持っていた。しかし、それ以上に、華人として東南アジア・東アジアの複数の国や地域にまたがって活動し、占術知識で名を馳せた。加えて、インドネシア独立後も依然として経済活動が自由に行えず、身に危険が及ぶ可能性もある不安定な立場に置かれていた。彼は、先行研究で注目されてきた周縁部にいた知識人に対してさらに周縁的な立場にあり、彼が生きたオランダ植民地統治期、日本軍政期、独立以降の時期のいずれにおいても、政府や軍といった行政構造の中央に統合されないどころか、監視、統制の対象となるような周縁的な存在であった。

様々な危機的状况を乗り越えてきた裏には、彼がジャワ社会における自身の周縁的な位置付けにかなり自覚的であり、それを利用して出版活動を行っていたことが大いに重要だと考える。それは、ウォン・カム・フーが香港に滞在することに決め、そこで占術知識を学んで出版活動に活かしたり、自らの出版物を娯楽だと主張したり、名前を使い分けたりしている部分に表れている。こうしたウォン・カム・フーの特殊な立場は、彼のプリンボンの出版にも表れている。そこで次章では、ウォン・カム・フーが手がけたプリンボンを時系列に沿って取り上げ、分析していく。彼が関わったプリンボンの分析からは、彼が周縁的な立場に置かれていたからこそ、彼の占いやプリンボンが当時の大衆を惹きつける力を持っていたことが見えてくる。

V ウォン・カム・フーを映し出すプリンボン

本章では、ウォン・カム・フーが執筆あるいは出版に関わった²⁷⁾ プリンボンを年代順に紹介し、その特徴を分析する。

26) プトリ・ウォン・カム・フーとして彼の名前と事業を継承したのは、「孫娘」レオニである。ウォン・カム・フーは離婚や死別によって4人の妻、その間の9人の子を持っていた。レオニは、ウォン・カム・フーの最初の妻との間の息子を父に、2人目の妻の連れ子の娘を母にして、1953年に生まれた。生物学的にはウォン・カム・フーの孫に当たるが、ウォン・カム・フーの養子として登録された。彼女は高校を卒業した1970年代頃からウォン・カム・フーに占術知識を教わり始め、ウォン・カム・フー存命中の1980年代に正式な継承者として公表された。彼女もまた、ウォン・カム・フーから継承した知識などに基づいて、2005年に自らのプリンボンを執筆、出版している（表1中105番）。

27) プリンボンにおいては、著者、翻訳者、編集者、出版責任者といった区分が曖昧であることに注意が

1. 1950年代のプリンボン

前章で紹介した通り、ウォン・カム・フーはインドネシア独立後の1949年に自身の出版社チュルミンを設立し、その頃からプリンボンの出版を始めたと考えられる。表1において、彼が携わった最古のプリンボンは、ゴ・フウェイ・ヨン・シャン・セン (Go Hway Yong Sian Seng) [1954] 『Primbon Khong Beng Sin Kwa』 (孔明神卦のプリンボン) (表1中15番) である。著者はウォン・カム・フーではないが、彼の出版社チュルミン (スラバヤ) から出版されている。

この本の著者は東ジャワ州ジョンバン県在住の華人ゴ・フウェイ・ヨンという人物である。彼は、東ジャワ州トゥバン県で生まれ、中華会館で教員をしたり、華人のスカウト運動 (padvinderij) を行ったりしていた人物とされている [Tan Hong Boen 1935: 79]。それだけでなく、シャン・センが「先生」²⁸⁾を意味する尊称であることを考えると、中国由来の伝統医療や呪術にも精通した人物だったと思われる。このプリンボンにおいて彼は翻訳者だとされており、中国語の書物あるいは口承で伝えられていた占術をインドネシア語にしたと考えられる。序文を読むと、ゴ・フウェイ・ヨンが自宅で行った占いが評判で、書籍化の要望があったためこの本を書いたのだとも説明されている [Go Hway Yong Sian Seng 1954: 4]。

このゴ・フウェイ・ヨンという人物は、ウォン・カム・フーと直接的な関わりがあり、師弟のような関係だったと考えられる。ウォン・カム・フーの伝記によれば、インドネシアの独立戦争の期間だった1948年頃、ジョンバンにいたウォン・カム・フーは、自身の借家周辺の治安が悪化する中で放火被害に遭った。その際に彼は、同じくジョンバンにいたゴ・フウェイ・ヨンの自宅に避難していた。さらに、その後スラバヤでの週刊誌 *Tjerman* の発刊に際して、ゴ・フウェイ・ヨンを顧問の一人としていた [Moerthiko 1979: 520]。そのため、ウォン・カム・フーは、ジョンバンの自宅で行われていたゴ・フウェイ・ヨンの占いやその評判を直接目にしており、彼に執筆や出版物の内容に関する助言を依頼できる状況でこのプリンボンを出版することにしたと推測できる。

ㄴ 必要である。ジャワの手写本における「著者」は、近代の英語圏における権威を含意する概念とは異なり、先行するテキストから写すことと、オリジナルの文章を書き加えることに明確な区別が存在しない [Florida 1995: 19]。その知識のルーツを手写本に辿ることもある出版物のプリンボンにおいても、こうしたジャワ独自の「著者」概念を踏襲していると思われる部分がある。さらには、著者名が書かれないことも多く、名前や役割が記載されていたとしても、実際その人物がどこまでその役割に関与したのかは不明である。少なくともウォン・カム・フーの場合、出版に対する使命感や責任感が強く、出版する本に出版社からの祝辞を掲載することも多いことから、彼の直接の介入の程度は不明にせよ、彼の出版社から出された本にはかなりウォン・カム・フーの意図が反映されていると考えられる。

28) インドネシアにおいて「先生」(sianseng; sinse; sinshe; singseh) は、中国由来の伝統的治療を施したり、中国薬を調合したりする人物を指して用いられ [Geertz 1960: 103]、呪医ドゥクンに相当する存在として説明されることが多い尊称である。

この本で説明される孔明神卦は、その名の通り諸葛亮孔明が用いたとされる占術で、陰陽の組み合わせを表す卦²⁹⁾を用いたものである。表紙には諸葛亮孔明と思われるイラストが大きく掲載されている（写真2）。しかし、このプリンボンの説明を読んでも、ラテン文字一文字ずつが書かれた7枚（P, R, I, M, B, O, N）と5枚（G, H, Y, D, B）のカードの組（写真2）を用い、それぞれから1枚ずつ引いた組み合わせによって占いの結果を導くものになっている。このカードに使われたPRIMBON（プリンボン）やGHYDB（神秘的を意味するインドネシア語gaibのことか）という文字の選択やラテン文字の使用をみると、単なる翻訳ではなく、インドネシアの読者にも理解しやすいように、著者やウォン・カム・フーが何らかのアレンジを加えた可能性がある。

この本が単なる翻訳でなかったことは、本のタイトルからもうかがえる。この本のタイトルは、単に「孔明神卦」とするのではなく、「孔明神卦のプリンボン」とされている。管見の限り、それ以前のプリンボンはジャワの民間暦を用いた占い、宮廷詩人による予言、伝統薬の調合など、ジャワの人々が先祖代々継承してきた、あるいは宮廷で保存されてきたと考えられているジャワ的な内容にとどまっていた。しかし、このプリンボンでは、中国由来の占術の説明書にプリンボンという名前が付けられている。既にジャワで広く知られている「プリンボン」という名前を冠することで、その内容をジャワに暮らす読者に瞬時に伝え、占いへの関心が高いプリンボンの読者層に手に取ってもらうことを意図したと考えられる。

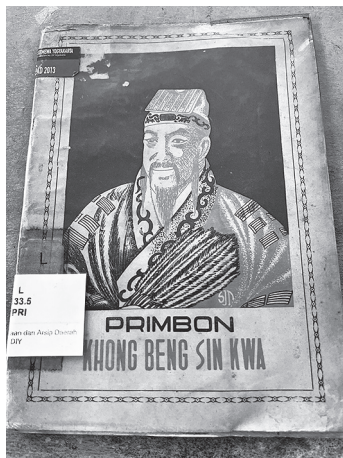


写真2 『Primbon Khong Beng Sin Kwa』表紙、付録の占い用カード（ジョグジャカルタ特別州立グラタマ・プスタカ図書館所蔵）

29) 陽を－（実線）で、陰を--（破線）で表し、これらを組み合わせて縦に3本並べたものを卦という。3本の並べ方の組み合わせは $2^3 = 8$ 通りあるため八卦と呼ばれ、8通りそれぞれに乾・兌・離・震・巽・坎・艮・坤という名前が付けられ、異なる性質を表す。

続いて、Tan Swie Hong Toodjin [1957] 『Primbon Embah Njata』 (本当のウンパ³⁰⁾ のプリンボン) (表1中18番) がある。この本はインドネシア語で書かれている。著者は後述するタン・スウィ・ホン道人とされているが、出版社はウォン・カム・フーが設立したチュルミンである。筆者が収集したものは、1957年の第4版の他に1961年の第6版(表1中36番)があり、それ以外の版については、初版1951年、第2版1954年、第3版1955年、第5版1959年と書かれている。表紙には浜辺で座禅をする高齢の男性が描かれている(写真3)。裏表紙は『日々の占星術』(Astrologi Harian) という本の広告となっており、文字と空を見上げる若い男女2人組、空には十二星座を表す記号が描かれている。

序文では、プリンボンの歴史はインド人が来る前から存在した古い書物から始まるということの説明し、「今日に至るまで、プリンボンについての神秘学 (ilmu gaib) と関連するあらゆるものが社会の中で生き続けていることは不思議ではないか」と述べる [Tan Swie Hong Toodjin 1957: 3]。ここでは、インド人が来る前から存在したと述べることによって、プリンボンが仏教やヒンドゥー教等の外来文明の影響を受ける以前からこの土地にあったものであることを強調する。そして、そのような古さを持つプリンボンの知識が現在でも使われているのだということを、「不思議ではないか」と呼びかけることで、肯定も否定もしない状態で読者に共感させる。

この序文に続いて、ウォン・カム・フーが執筆した可能性が高い出版社からの祝辞が次のように書かれている。

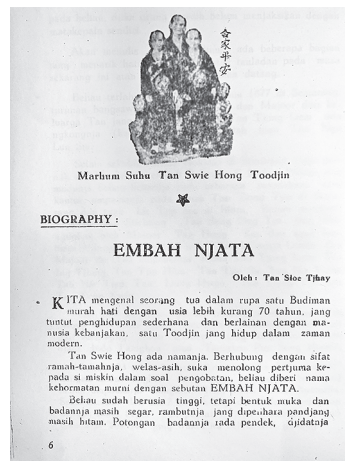
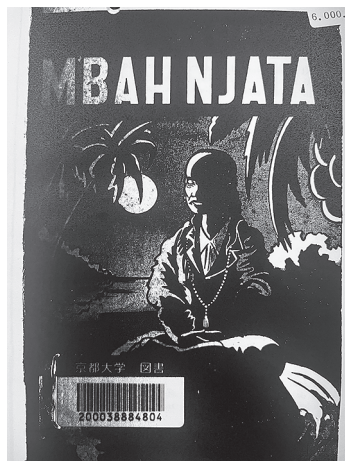


写真3 『Primbon Embah Njata』表紙, p.6 (京都大学東南アジア地域研究研究所図書蔵)

30) 前章で述べたンパ (Mbah) と同様の意味で用いられる敬称。

文化や一般大衆にとって有益な出版物を世に送り出すことは、芸術や文学という観点からみても、公共図書館という観点からみても、全ての出版社に課された責務である。

したがって我々は、その決して軽いとは言えない義務を自覚しており、出版界での従来の慣行から逸脱するつもりはない。

プリンボンの書を読むことは、普通とは異なる。しかし、読み方を心得ているのなら、それはなんら特別なことではない。

重要なのは、神は正義にして全能であり、かつ慈悲深いのだという信念である。こうした性質はいかに知りうるのか。古来の書物には様々な指針が遺されており、それらはプリンボン、兆し (sasmita)、観相 (wirasat)、寓意 (kias) などと呼ばれる。[ibid.: 5] (筆者翻訳)

ここでは、出版社の役割と責任を自覚していることを述べた後に、「プリンボンの書を読むことは、普通とは異なる。しかし、読み方を心得ているのなら、それはなんら特別なことではない」と書かれている。この解釈を読者に委ねる簡潔な文は、読者がプリンボンを読んで何かが通常と違う、逸脱していると感じた場合、その責任はこの本の出版社にあるのではなく、読者自身の読み方や神への信仰心にあるのだと感じさせるものである。

序文を終え内容に入ると、「合家平安」という漢字と3人の僧侶あるいは儒者のようなイラストが入っており、タン・スウィ・ホン道人の伝記から話が始まる。この伝記部分は、タン・スウィ・ホン道人本人ではなく、タン・シュウ・チャイ (Tan Sioe Tjhay) という人物によって書かれている (写真3)。そこでは、タン・スウィ・ホン道人が1877年頃にスマランで生まれ、治療をしたり、道教の教えを説いたりしていたことが書かれている。その説明が終わると、夢や自然現象の解釈、陰陽、病気の治療法といった、タン・スウィ・ホン道人の知識とされるものが書かれている。

ここでも、華人的な人物や陰陽などの中国由来の知識も含めた呪術的知識の集成を、「インド人が来る前から存在した古い書物」のプリンボンとして示すことで、ジャワ的な伝統の中に位置付けようとしていることがわかる。こうしたプリンボンは、外来の思想や宗教の影響を排除してジャワ独自の伝統を重視する、あるいはプリンボンの起源を宮廷伝統に求めることでその正当性を強調する一部のジャワ人にとっては受け入れ難いものだったかもしれない。しかし、「既に方法を知っていれば、それは単に通常のことになる」とある通り、その受け入れ難さは読者の読み方の問題にされているのである。

さらに、このプリンボンの出版の背景には、ウォン・カム・フーとタン・スウィ・ホン道人の直接的な関係がある。1961年に再版されたものでは、出版社名義の文章で「チュルミンはタン・スウィ・ホン道人を助言者として迎え入れるという名誉を受けた」と説明されており、

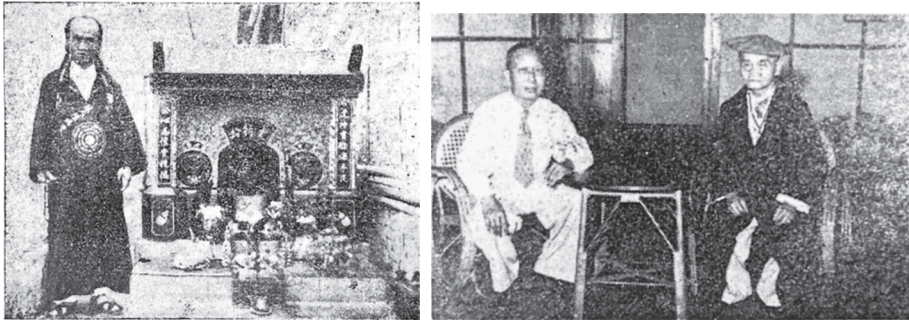


写真4 タン・スウィ・ホン道人(左) / ウォン・カム・フーとタン・スウィ・ホン道人(右)
出所: 『Primbon Embah Njata』 [Tan Swie Hong Toodjin 1961: 91-92] より

ウォン・カム・フーとのツーショットなどの写真も掲載されている(写真4) [Tan Swie Hong Toodjin 1961: 9, 91-92]。こうした説明からは、ウォン・カム・フーがタン・スウィ・ホン道人を師として敬っており、その交友関係によってこのプリンボンの出版に至っていることがわかる。

1950年代に出版された2つのプリンボンを見てみると、ウォン・カム・フーは、自身が交流のあった中国的な「先生」や「道人」の持つ占術知識をプリンボンとして出版し始めたことがわかる。そしてそのプリンボンには、占いを比較、相対化する視点が表れている。それは、プリンボンとは占術知識を説明するものであり、それはジャワだけでなく中国にも存在するのだという視点である。この視点は、ウォン・カム・フーが植民地政府による正規の教育制度の外で、ジャワと中国を思想的にも、空間的にも頻繁に往復する中で知識を習得してきた結果、単一の伝統の正統性に拘束されなかったことによって可能になっている。それゆえに、単なる中国古典の翻訳でもなく、それまでのプリンボンとも異なるという特徴で多くの人々を惹きつけるプリンボンを生み出すことができたのである。

こうした視点によって対象が拡大されたプリンボンの出版を通じて、ウォン・カム・フーは、1950年代にインドネシアという国家が新しく形成されていく中で、プリンボンという言葉や媒体から想起されるジャワの伝統に、華人とその文化も含めようと試みたのである。プリンボンは、中国の占術やその基盤となる書物を翻訳し、ジャワ社会の人々に感覚的に伝え、さらに既存のジャワの占術とも同等のものとして位置付ける媒体であったと言える。

2. 1960年代のプリンボン

1960年代になると、ウォン・カム・フーのプリンボンは、単にジャワと中国の占術書の翻訳、中国起源の占いを位置付けるということ以上に大きく展開する。その特徴が明確に表れているのが、ウォン・カム・フー [1961] 『Primbon Kelahiran Manusia』(人間の出生のプリンボン)(表

1中30番)である。この本はスラバヤのチュルミンから出版され、インドネシア語で書かれている。序文によれば、この本のタイトルには、自分自身のことだけでなく、自分の子供や仲間といった他者のことも占星術をもとに確認してほしいという願いが込められている。

この本の最大の特徴は、ウォン・カム・フーが1960年11月27日³¹⁾に書いた序文の最初の数段落から読み取れる。

占星術 (Astrologie) は華語で算命 (Soan Bing あるいは Swie Mia) と呼ばれ、運命を計算することを意味する。天体の影響は、すべての人々の人生だけでなく、国にも関わることである。

「Your Character is Your Destiny」という格言がある。あなたの性質があなたの運命になる、という意味である。他の言い方では、ある人の運はその性質／行為によって決められる。自分自身について知る他に、我々は他者、特に自分の仲間になる人々の性質も知る必要がある。そして、全てを知る最も良い方法は、天文学 (ilmu Falak) とも呼ばれる占星術 (ilmu perbintangan) を確認することである。[Wong Kam Fu 1961: 3] (筆者翻訳)

注目すべきなのは、この短い2段落の中で「占星術」に相当する言葉が、アストロロジー (Astrologie)、算命 (Soan Bing, Swie Mia)、イルム・ファラック (ilmu Falak)、イルム・プルビントンガン (ilmu perbintangan) という様々な言語由来の語で述べられていることである。アストロロジーはギリシャ語、算命は華語、イルム・ファラックはアラビア語、イルム・プルビントンガンはインドネシア語 (あるいはムラユ語) に由来する言葉である。ここからは、西洋、中華、イスラーム、インドネシアそれぞれにおける占星術が言い換えられながら同一のものとして扱われていることがわかる。ここにおいて、ウォン・カム・フーは比較、相対化する対象を中国だけでなく、西洋、イスラームも含めて広げているのである。

このような複数の伝統における占星術を比較、相対化しながら統合していく特徴が端的に表されているのが、表紙の曼荼羅である (写真5)。このプリンボンの表紙は、六芒星を中心に数字、惑星名 (漢字と英語双方で表記)、水・風・土・火の四元素と三つの宮 (柔軟宮・固定宮・活動宮)³²⁾ の組み合わせ、十二支、十二星座が配置されている。文字だけではなく、惑星や十二星座を象徴する記号も付されている。類似の図形は本文内でも用いられており、そこでは

31) この序文が書かれた1960年11月27日は、ウォン・カム・フー62歳の誕生日である。生年月日を重視する占星術家が自身の誕生日に序文を書いていることから、ウォン・カム・フーはこの本にひととき強いこだわりを持っていたと推測できる。

32) 西洋占星術において、十二星座は柔軟宮 (mutable)、固定宮 (fixed)、活動宮 (cardinal) の3つに区分される。柔軟宮には射手座・双子座・乙女座・魚座、固定宮には獅子座・水瓶座・牡牛座・蠍座、活動宮には牡羊座・天秤座・山羊座・蟹座が相当する。



写真5 『Primbon Kelahiran Manusia』表紙（筆者所有）

陰陽太極図を中心に、十二星座や十二支と24時間の対応が示されている。この曼荼羅的な図からは、数字、惑星、星座、十二支などが一つの円環的な秩序として統合されているように感じられる。

同様の特徴は、このプリンボンの内容にも表れている。彼はまず占星術についての説明を行う。そこでは、占星術は最も古い学問であり、「エジプト、カルデア、アラブ、ギリシャ、インド、そして中国。現在でも占星術は西洋の人々に本当に信じられている」と説明する [ibid.: 5]。例えば、西洋ではピタゴラスから19世紀の天文学者まで、中国では黄帝³³⁾ から、インドではガルガ、パラージャラ、ミヒラ³⁴⁾ が挙げられる。ここでは、さらに中東の複数地域やインドまでも視野に入っていることがわかる。

こうした占星術の説明の後、子供の生年月日に基づく占い、九惑星の兆候と影響、色の意味、植物の兆候、人相学、数字くじの数字の選び方などが説明される。基本的には、各星座、誕生

33) 中国の伝説上の皇帝。暦の制定で知られる。

34) ガルガ、パラージャラ、ミヒラの3人はインド占星術 (Jyotisa) に関わる人物である。ミヒラはガルガらの古典をもとに『プリハット・サンヒター』などを集成した人物として知られている6世紀のインド占星術の大家である。ミヒラは、『Primbon Kelahiran Manusia』原文では Mihisa と書かれており、ミヒラ (Mihira) の誤記であると考えられ得る。

月、色などがどのような意味を持つのかといったことを項目ごとに説明している。中でも、表3に示した目次の冒頭3～5を見ると、プリンボンに冠した小見出しが3つ並び、中華暦、インドネシア暦、西暦のそれぞれで異なる項目として分けられ、同じ言葉を使って並列されていることがわかる。目次の6以降は、様々な内容が個別に並べられている。例えば、目次17の「三宝について」、20の「顔相を見る術」、25の「十二支」などは説明やイラスト（写真6）を見る限り、中国に由来する占術である。8の「十二星座の影響」、18の「四季について」は、各項目の内容で使われる語彙に十二星座の名前（Taurus, Gemini など）が多用されており、西洋占星術や西洋由来の占術である。22の「くじの数字を選ぶための数秘」、23の「有効な呪文」は、ジャワの民間暦の曜日を使用したり、呪文にジャワ神秘主義的な表現「4人の兄弟、5番目の自分」（Saudaraku empat kelima pantjar）が用いられていることから、ジャワ由来の占術である。このように様々な伝統に由来する占術が特に分類されたり、まとめられたりすることもなく、具体的な名称で個別に項目立てられている。ここからは、表紙絵や序文で複数の伝統における占術がうまく統合されているように見せる一方で、その内部ではそこまで体系化されているわけではなく、それぞれの占術が独立したまま具体的に説明されていることがわかる。

同年には、先述した Tan Swie Hong Toodjin [1957] 『Primbon Embah Njata』（本当のウンパのプリンボン）の再版も出版されている（表1中36番）。

1950年代のプリンボンでは、中国の占星術や呪術的知識に詳しい華人をプリンボンというジャワの伝統に位置付ける試みがなされていたが、1961年に出版されたこのプリンボンにおいては、西洋、中華、イスラーム、中東、インドの占星術といった複数の伝統が関わる、より大きな世界の中に、インドネシアの占星術としてプリンボンに位置付けようとする試みがなされ

表3 『人間の出生のプリンボン』より目次（筆者翻訳）

1. 序文	15. 身体の部位の予兆の術
2. 占星術の概観	16. 補足
3. 子供の出生のプリンボン：中華暦より	17. 三宝について
4. 子供の出生のプリンボン：インドネシア暦より	18. 四季について
5. 子供の出生のプリンボン：西暦より	19. 神の摂理による兆候
6. 子供の出生日	20. 顔相を見る術
7. 子供の出生月	21. 健康な赤ちゃんを産むためのプリンボン
8. 十二星座の影響	22. くじの数字を選ぶための数秘
9. 九惑星の性質と影響	23. 有効な呪文
10. 宝石の由来	24. 寝ている時の女性
11. 色とその意味	25. 十二支
12. 木、果実、花、葉の意味と象徴	26. 年鑑1960年、1961年、1962年
13. 外国語での宝石	27. 七曜と五曜を探すための年鑑200年（1800～2000年）
14. 女性の性質の秘密	

ILMU MELIHAT TAMPANG MUKA.

(Siang Lie Hing Tjin).

DIANTARA sekian banyak buku2 Tionghoa tentang ilmu melihat tampang muka, yang menguraikan hal tabiat atau watak, pun juga menuturkan soal nasib atau peruntungan-nya.

Disini kami terjemahkan primbon Siang Lie Tjin ialah berarti ilmu melihat tampang muka yang berdasar atas kebenaran dan pertimbangan yang TJING LIE atau adil. Walaupun jumlah matjam dan bentuknya manusia ada beribu-ribu djuta banyaknya, namun dasar sifatnya tidak bisa melebihi daripada lima unsur yang disebut NGO HING atau Pantjajndera.

Ngo Hing = Pantjajndera = Five Elements ialah lima unsur yang disebut dalam bahasa Tionghoa: Kim Bok Swie Hoh 't'ho atau Logam, Kaju, Air, Api dan Tanah.

Demikianlah kami silahkan pembatja memperhatikan ilmu ini dan mudah-mudahan ber manfaat bagi pedoman pergaulan masyarakat.



Bentuk inilah yang disebut muka lembu atau sapi.

Matanya pandjang melihat dengan lempeng dan teliti.

Djika bitjara suaranya keras dan njaring sekali.

Kalau berdjalan tindakannya perlahan serta hati-hati.

Orang ini selain pandai, run otaknja tjerdas istimewa.

Selain mempunyai rumah2 nun banyak sawah2 dan luas tanah-tanahnja.

Kekajaannya tjukup, serta dapat hidup begitu amat mewah.

Walaupun demikian, sunguh ketjewa karena namanja tak pernah dikenal oleh orang2 banyak.



Djidat bentuk persegi, itulah disebut muka harimau atau matjan.

Kupingnja ketjil, tapi matanja bundar dan sangat besar.

150

写真6 『Primbon Kelahiran Manusia』 p. 150 「顔相を見る術」

ている。この位置付けが表紙絵や序文ではうまく統合されるものとして表現されている一方で、その内部ではそれぞれが独立したままバラバラに並べられているというのも重要な特徴である。プリンボンは複数の文明における占いの伝統を並べた上で、「インドネシアの占星術」としてジャワの占いを位置付ける媒体になっている。

この後の1962年から1966年にかけては、前章で述べたように、政情不安によりライセンスが取り消され、出版を行うことが困難になっていた。しかし、筆者は再版ではあるがこの期間に出版されたプリンボンを3冊見つけることができた。

1冊目は、ビン・キン・チュ (Bing King Tjioe) [1964] 『Primbon Dampoo Awang』 (ダンポ・アワンのプリンボン) (表1中41番) である。このプリンボンは、ウォン・カム・フーの出版社チュルミンから出版され、インドネシア語で書かれている。著者は、ビン・キン・チュという人物であるが、助言者としてウォン・カム・フーの名前も書かれている。著者であるビン・キン・チュに関する記述は他に見つかっておらず、その人物像は不明である。この本は重版の

希望に応える形で出版された第6版であることが序文で述べられており、著者の想像以上に売れていた [Bing King Tjioe 1964: 3-4]。この他にも、1970年に出版された第8版（表1中46番）も確認できている。

この序文では、ダンボ・アワンとは、「Sam Poo Twa Lang」もしくは「Sam Poo Tay Djin」（三保大人／三宝大人）という中華名を持ち、イスラームに関して深い知識を持つ聖なる人物であると説明されている。さらに、三保大人については序文の中で、「彼は15世紀初めに中国の永楽帝に送られてジャワ島を訪れスマランに上陸し、グドゥン・バトゥにて亡くなった。彼の言葉が必ず現実になるため、人々から聖人とみなされていた。彼によって漢字で書かれた手書きの占い書が残され、500年経った今でも利用されている」と説明されている。三保大人は、その真偽には諸説あるものの、明の永楽帝のムスリム宦官であった鄭和であると考えられており、ジャワ社会において神格化されている。また、スハルト体制崩壊以降は、ジャワ社会におけるイスラーム化に寄与した存在として再注目されている [貞好 2022; Budiyanto and Latifah 2019]。

こうした説明の一方、その内容は占術の『孔明神卦のプリンボン』とほぼ同じである。7枚のカードと5枚のカードそれぞれから1枚選び、その組み合わせで占うものとなっている。違いとしては、カードに書かれている文字が7枚カードの組みでは、T, J, E, R, M, I, N（出版社名チュルミンとなる）、5枚のカードはそれぞれH, I, D, U, P（人生hidupとなる）になっていることである。各カードの組み合わせによる占いの結果も、表現は若干異なるものの、意味することはほぼ同じ内容であるため、『孔明神卦のプリンボン』の内容を参考に、アレンジを多少加える形で作成したと考えられる。

2冊目は、タン・ブン・キム（Tan Boen Kim）[1966] 『Primbon Ilmu Adjaib』（魔術のプリンボン）（表1中42番）である。このプリンボンのサブタイトルには、「中華経典（kitab Tionghoa）からの引用」と書かれている。ウォン・カム・フーの出版社チュルミン（スラバヤ）から出版され、インドネシア語で書かれている。筆者が収集したものは1966年版であるが、本の記載によれば第1版1951年、第2版1952年、第3版1966年とのことである。また著者は、タン・ブン・キムという人物であるが、企画・事務担当としてウォン・カム・フーの名前も入っている。

著者タン・ブン・キム（陳文金, 1887-1959）は、インドネシア華人の作家、記者である。タン・ブン・キムは、1887年にジャカルタで生まれ、学校には通わなかったものの、1910年代からいくつかの小説を出版したり、クドゥス（Kudus）における民族対立の報告（1918年）を行ったりしている。そして *Ien Po*（ジャカルタ）の編集者（1917年）、*Kien Pao*（パレンバン）の編集主幹（1926年～1927年）も務め、1959年にジャカルタで死去した [Suryadinata 2015: 166-167]。スリャディナタによるこの説明を踏まえると、タン・ブン・キムは、ウォン・カ

ム・フーより11歳年上の作家、記者であり、ウォン・カム・フーが記者として活動し始めた1910年代後半～1920年代にかけて華人系ムラユ語新聞で編集者を務めていた。両者の関係は定かではないが、ジャーナリストとして活動する中で出会い、付き合いを続け、タン・ブン・キムが60代であった1951年に、ウォン・カム・フーの設立した出版社チュルミンからこのプリンボンの初版を出版するに至ったのではないかと推測される。そして、彼の死後1960年代になっても再版されている。

3冊目は、ウォン・カム・フー (Wong Kam Fu) [1966] 『Primbon Djojobojo: Berikut Ramalan Ronggowarsito』 (ジョヨボヨのプリンボン：ロンゴワルシトの予言も収録) (表1中43番) である。これも彼の出版社チュルミン (スラバヤ) から出版されており、インドネシア語で書かれている。第1版が1947年、第2版が1959年、第3版が1966年であり、筆者が収集したものは1966年の第4版である。この再版状況からも、1962年から1966年の間に出版を行うことが相当困難であったと推測できる。

このプリンボンの内容は、予言者ジョヨボヨ王が語ったジャワに訪れる8つの時代の説明、宮廷詩人ロンゴワルシトの予言的なジャワ語詩とそのインドネシア語翻訳と解釈がメインとなっている。しかし興味深いのは、この2つの予言の間、全48ページ中の23ページ目に、「Tjino Gela-gelo: Mau djadi WNI tak boleh Mau pulang ke RRT ogah & ke Taiwan Idem Dito.」 (頭を左右に振る華人：インドネシア国民になりたくてもなれず、中華人民共和国には帰りたくはなく、台湾も同様である) という題の1ページのみの文章が差し込まれていることである。ここでは、ジョヨボヨの予言に由来する「オランダ人は1組だけ残り、華人は頭を左右に振る」 (Londo kari sedjodo, Tjino gela-gelo) という表現が巷でよく聞かれると紹介されている。この内容の大部分はジョグジャカルタの日刊紙 *Dwikora* の1966年4月26日号のとある記事の紹介である。その記事とは、中国生まれで35年間インドネシアで暮らしてきた人物が、インドネシア国籍を取得できず、共産主義の中国には帰りたくなく、アメリカに支配された台湾にも行きたくはなく、その状況がジョヨボヨの予言の通りであると感じている、というものである [Wong Kam Fu 1966: 23]。こうした記事が当時の他の出版物でどう取り上げられていたのかについては、現時点では十分に確認できていないが、ウォン・カム・フーは、第4版にあたるこのプリンボンの中で、単なる予言の説明だけでなく、この記事を挟むことで、現代の自分を取り巻く状況を予言と絡めつつ、国家によるインドネシア華人に対する政策の批判を示唆していると考えられる。

1962年～1966年に出版されたプリンボンを見ると、出版ライセンスの取り消しやそれに伴う破産を経験しながらも、出版社チュルミンを維持し、人気のプリンボンを再版していたことがわかる。さらに、ただ再版するだけではなく、予言に関するプリンボンの中間のページに政治批判的な文章を差し込むということが行われていた。こうした様子からは、プリンボンに関

しては、定期刊行物と比較して出版統制の影響が少なく、制約がある中でも出版を行うことが可能であったと考えられる。

3. 1970年代～1980年代のプリンボン

前章で述べたように、ウォン・カム・フーは、出版ライセンスの回復以降、友人の助けや占星術の評判を利用しながら経済的な困難を乗り越え、徐々に自身の出版業を再開させていった。これ以降の時期に出版されたプリンボンを筆者は2冊確認している。

1冊目は、先に紹介したビン・キン・チュ『Primbon Dampoo Awang』（ダンポ・アワンのプリンボン）の再版 [1970]（表1中46番）である。本書は第8版であるが、第6版と比べて内容に大きな変化は無い。ただ、序文にはこの本が大変人気であり、1950年～1965年の間で7版6万部に達したということが付け加えられている。

2冊目は、それから10年後に出版されたウンバ・ウォンソルジョ（Embah Wongsorejo）[1980]『Primbon Maha Pujangga』（偉大な宮廷詩人のプリンボン）（表1中78番）である。このプリンボンは、出版社ナガ（Naga, ジャカルタ）から出版され、インドネシア語で書かれている。著者のウンバ・ウォンソルジョは、前章で説明したように1970年代以降に用いられていたウォン・カム・フーの別名である。

このプリンボンでは、ジャワ的伝統の要素が強調されている。表紙には、森の中で坐禅を組み瞑想している老年の男性が描かれており、ジャワ神秘主義の修行者を想起させる（写真7）。サブタイトルでは、ジャワ神秘主義の25の知識の集成、各人の出生に基づいて性格を見るた

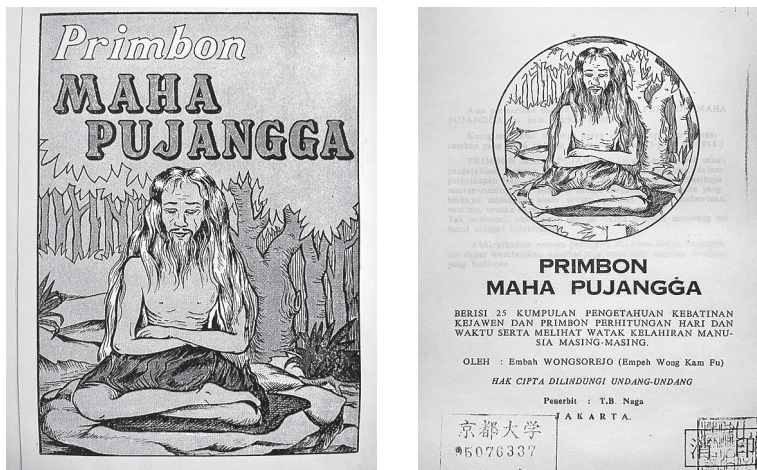


写真7 『Primbon Maha Pujangga』表紙、内表紙（京都大学東南アジア地域研究研究所図書室所蔵）

めの曜日と時間の計算のプリンボンが内容として含まれていると説明されている。序文を見ると、このプリンボンは七曜 (hari), 五曜 (pasaran), 年を計算するジャワ神秘主義 (kejawen) の知識として知られる重要な知識であり、人々が重要な出来事を行う際に役立つものだと説明している。こうした表紙や冒頭の説明を見る限りは、ジャワ的伝統が強調されている。

一方で、具体的な内容を見てみると、西暦における生年月日を用いた数秘術、³⁵⁾ 各時間や曜日と星との関係、インド占星術や仏教、アラビア語に起源を持つ呪文、ジャワ暦、西暦、中華暦それぞれの生年月日による占い、各人に適した宝石などが説明されている。序文に書かれている七曜と五曜に基づいたジャワの占術は説明されているものの、それは81ページある内容のうち中央の6ページ (pp. 40-45) のみである。それ以外の内容は、西洋占星術など外来の占術の影響を受けたものが多く、冒頭のタイトルや表紙絵、序文の説明から想起されるものとは内容が乖離している。こうした内容からは、冒頭のジャワ的伝統の要素が表面的に利用されているとさえ感じられる。

こうしたジャワ的伝統の表面的な利用には、前章で述べたンバ・ウォンソルジョという名前の利用の背景と重なる部分がある。スハルト体制下での華人に対する同化の圧力という政治的問題に対処しつつ、ジャワ人読者の興味を引く形で自らの知識を提示するという意図があったのでは無いかと考えられる。実際1970年代～1980年代にかけてはジャワ神秘主義が人々の関心を集めており、それは公認宗教化が進む中でジャワ神秘主義の位置付けを確立しようとする政治的な影響すら持っていた。ジャワ的伝統を表面的に出すことは、当時の政治的状況や社会的関心を踏まえて、ウォン・カム・フーのプリンボンとその中の幅広い知識を人々に受け入れてもらうために重要な役割を果たしていたと言える。プリンボンは、西洋占星術や中国の占術などを、ジャワ的伝統を隠れ蓑にして読者に届ける媒体として機能していたと考えられる。

本章は、ウォン・カム・フーが執筆、企画、助言、出版に係る事務などの形で関わったプリンボンを取り上げて分析した。1950年代のプリンボンは、中国の占術の翻訳や華人と思われる人物に焦点が当たっており、ジャワと中国の占いを比較、相対化する視点が表れていた。それによって、中国の占術や呪術的知識に詳しい華人をプリンボンというジャワの伝統に翻訳し、位置付ける試みがなされていた。1960年代のプリンボンでは、西洋、中華、イスラーム、インドといった文明における占星術を並列することによって、各文明を含んだより大きな世界の中に、ジャワひいてはインドネシアの占星術を位置付けようとする試みがなされていた。1962年～1966年のプリンボンは、出版統制を乗り越えるだけでなく、自身を取り巻く政治的状況

35) 西暦の年4桁、月2桁、日2桁の計8桁の数字を全て足し、さらにその和の数字が一桁になるまで足す。例えば、1999年12月31日であれば、 $1 + 9 + 9 + 9 + 1 + 2 + 3 + 1 = 35$ 、35を3と5に分け、 $3 + 5 = 8$ となり、最終的にこの8という数字が占いに用いられる。最終的に得られた1桁の数字1～9は、その人物に影響を与えている太陽、月、惑星にそれぞれ結び付けられている。

を批判する媒体にもなっていた。1970年代～1980年代のプリンボンには、ジャワ神秘主義的知識の集成であるかのように見せることで、内実の複数の文明にまたがる占術知識を人々に提示することを試みていた。本章の分析から、ウォン・カム・フーにとってのプリンボンは、外来の占星術や占術を翻訳し、相対化し、時に覆い隠すことで、ジャワ社会に占術知識やそれを取り巻く政治的、社会的状況を伝える媒体だったとわかる。

VI おわりに

本論文は、20世紀に占星術や出版の分野で活動したウォン・カム・フーと彼が出版したプリンボンに注目し、外来の占術がプリンボンの出版を通じてジャワ社会に紹介される過程、そこから導き出される知識人像を明らかにすることを目的とした。

これまでプリンボンは、暦占いを中心とするジャワの伝統を構成する呪術的知識の集成と考えられてきており、既存の研究もその影響を受けて、読者や実践者側の記録や分析、そこからわかる世界観や分類体系、21世紀の現代社会での応用といった知識の構造や保持に焦点が当たってきた。一方で、20世紀においてプリンボンは出版資本主義に支えられて大きな展開を迎えていたという動態はこれまであまり注目されてこなかった。

20世紀におけるプリンボンの動態的側面を捉えるために、本論文では、プリンボンの出版に携わった人物に注目し、彼らをジャワの知識人として捉えることを試みた。従来のジャワの知識人に関する研究においては、支配的な制度の外側、社会の周縁部にいて外来の知識を媒介する役割を担った知識人が重要であったことが指摘されてきた。一方で、先行研究で注目されてきた支配者側の知識人、批判者側の知識人という視点は、インドネシアにおける国家形成を説明する上で重要な役割を果たした一方で、ジャワ的伝統と西洋近代の二項対立的な理解に収束してしまう傾向があり、複数の思想の交錯や統合の試みを捉えることが課題であった。

そこで本論文は、プリンボンの動態的な側面を、複数の思想の交錯や統合の試みとして捉えるために、プリンボンの出版史における重要人物ウォン・カム・フーに注目した。ウォン・カム・フーは、20世紀において幅広く出版に携わり、プリンボンが大衆化されていく過程を支えた人物である。第III章では20世紀におけるプリンボンの出版の開始から大衆化されるまでの過程を、出版統制を逃れる娯楽出版として展開した第1期、ジャワ神秘主義への関心の高まりを支えた第2期、内容がジャワ的な知識に留まらなくなり、拡大するインドネシア語読者向けに大衆化された第3期として説明した。この3つの時期に跨って活動し、プリンボンの変化を先駆したのがウォン・カム・フーであった。

ウォン・カム・フーは、ジャーナリストとしての活動や出版統制など、先行研究で取り上げられていたナショナリストらの知識人と共通する特徴を持っていた。しかしそれだけではな

く、近代教育制度の外部で知識を得て、華人として東南アジア島嶼部から東アジア沿岸部に掛けて複数の国や地域にまたがって活動し、インドネシア独立以降も政府の監視や統制の対象となるという、より周縁的な立場から知識の生産、流通に関わり続けた。

第V章では、そのウォン・カム・フーが出版に携わったプリンボンの特徴について次のように分析した。1950年代のプリンボンは、中国の占術をプリンボンとして翻訳する行為を通して、ジャワと中国の占いを比較、相対化するものとなっていた。1960年代のプリンボンは、そこからさらに西洋占星術、イスラーム占星術、インド占星術を見据えたものになっており、複数の文明における占術が並列されていた。1962年～1966年の出版ライセンス取消時には、既存のプリンボンの再版が行われており、その中では、予言に絡めた記事を差し込んで、政治的な現状への言及も行われていた。さらに1970年代以降のプリンボンは、表面上でジャワ性を強調することで、複数の伝統における占術を受容させる隠れ蓑になっていた。

ここからわかるのは、ウォン・カム・フーが、プリンボンの出版を通じて複数の伝統における占術知識を翻訳、並列し、円環的な枠組みの中に再編していたことである。『Primbon Kelahiran Manusia』の序文や図(写真5)に象徴されるように、ウォン・カム・フーは、ジャワ、中華、西洋、イスラーム、インドなどの複数の思想伝統における占術を、同等なものとして翻訳しながら扱い、曼荼羅のような図の中で並べて提示した。この曼荼羅は占星術的な時間のサイクルとして見えるだけでなく、西洋占星術や八字に由来する語がそれぞれ読み換え可能なものとして対応するように見える。このように円環的に表現することによって、複数の思想的伝統に優劣や時間的前後関係を与えず、正統性や帰属を問題にしない。先行研究で焦点が当たったジャワ人を中心とするナショナリストの議論では、ジャワの伝統と西洋的近代の二項対立の枠組みの中で、両者をいかに統合したのかが分析されてきた。一方で、ウォン・カム・フーに注目することで明らかになったのは、占術を取り上げながら、東西を問わない複数の伝統を、それぞれの独自性を損なわずに円環的な枠組みとして再編する試みであり、それがウォン・カム・フー自身を含め、国民国家形成において周縁的な立場に置かれた人々を包括する様子である。それを可能にしていたのがプリンボンという媒体である。

ウォン・カム・フーにとってのプリンボンは、複数の伝統における占術を、優劣を設けずその時々の方勢に合わせて伝える上で、時に占術や占星術の訳語として、時に複数の異なる占術全体を統合しうる枠組みとして、時に隠れ蓑として、役割を変えることのできる非常に便利な媒体だった。彼は、彼が生きた20世紀を通じて、『Primbon Djojobero: Berikut Ramalan Ronggowarsito』内の記事のように「首を左右に振って」(gela-gelo) [Wong Kam Fu 1966: 23], あらゆる方面に注意を払わざるを得ないような周縁的な状況に置かれてきた。その中で、いずれの状況に対しても柔軟に対応できたプリンボンは、彼の持つ経験、知識、人間関係、彼が置かれた政情や社会的立場などを、直接的に主張するわけではなく静かにかつ清明に映し出して



写真8 チュルミン出版のプリンボン等で頻繁に使用される
ロゴマーク。眼鏡をかけたウォン・カム・フーと思
われる人物が「明鏡」と筆で書いている。

出所：[Wong Kam Fu 1961: 176]

いた。プリンボンは、彼の周縁的な状況を映し出す明鏡、チュルミンとなっていたのである（写真8）。

本論文において扱ったプリンボンは、単に伝統の継承を担う媒体なのではなく、各時期の政治的影響を受けながら複数の伝統が交錯する状況と、その中で周縁的な立場にあった知識人を映し出す明鏡のような媒体になっていた。それは、複数の伝統における知識を組み合わせる試みがなされる中で、プリンボンの概念が巧みに操作されたことによるものである。こうした複数の伝統の再編が、先行研究で注目されたようなジャワ人の知識人というよりもむしろ、ウォン・カム・フーのような20世紀のジャワ社会において常に周縁に置かれていた占術分野の知識人に明確に見られるのである。こうした占術の担い手に注目することで、近代出版資本主義の中で展開した知的実践を、単一の伝統の創造に基づくナショナリズムの枠に留まらず、社会の周縁部から複数の伝統を再編するものとしても捉えることができるのである。

謝 辞

本研究は、2023年度京都大学東南アジア地域研究研究所共同利用・共同研究拠点「グローバル共生に向けた東南アジア地域研究の国際共同研究拠点（GCR）」パイロット・スタディプログラムの助成によって行われた。

参考文献

日本語文献

アンダーソン、ベネディクト・R.O'G. 1995. 『言葉と権力——インドネシアの政治文化探求』中島成久（訳）、東京：日本エディタースクール出版部。（原著 Anderson, B. R. O'G. 1990. *Language and Power*;

- Exploring Political Cultures in Indonesia*. Ithaca: Cornell University Press.)
- . 2007. 『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』白石隆；白石さや（訳）。東京：書籍工房早山。（原著 Anderson, Benedict R. O'G. 2006. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. Revised ed. London and New York: Verso.）
- 福島真人. 2002. 『ジャワの宗教と社会——スハルト体制下インドネシアの民族誌的メモワール』東京：ひつじ書房.
- 倉沢愛子. 2014. 『9・30 世界を震撼させた日——インドネシア政変の真相と波紋』東京：岩波書店.
- 宮崎恒二. 1981. 「ジャワのト占と分類体系—— Primbon をめぐって」『民族学研究』46(2): 208-225.
- . 1983. 「ジャワにおける占いと社会変化——文化の連続と断絶」『民族学研究』48(2): 129-145.
- 西村朝日太郎. 1963. 「呪師の呪的行動の典拠としての Primbon」『岩井博士古稀記念典籍論集』岩井博士古稀記念事業会（編），491-499 ページ所収。東京：岩井博士古稀記念事業会.
- ピジョー, Th. G. Th. 1987. 「ジャワの占いと分類体系」『オランダ構造人類学』P.E. デ＝ヨセリン＝デ＝ヨング. 他（編），宮崎恒二他（編訳），105-131 ページ所収。東京：せりか書房。（原著 Pigeaud, Th. G. Th. 1928. *Javaansche wichelarij en klassifikatie*. In *Feestbundel uitgegeven door het Koninklijk Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen*. Weltevreden: G. Kolff.）
- レッドフィールド, R. 1978. 『未開世界の変貌』染谷臣道；宮本勝（共訳）。東京：みすず書房。（原著 Redfield, R. 1953. *The Primitive World and Its Transformations*. Ithaca: Cornell University Press.）
- 貞好康志. 2016. 『華人のインドネシア現代史——はるかな国民統合への道』松本：木犀社.
- . 2022. 「連載インドネシア華人の歩み第2回 鄭和来航——現代に生きる伝説と謎」『月刊インドネシア』2022 年 12 月号：29-31.
- 関本照夫. 1982. 「サウイト事件の文化論的考察」『千年王国の民衆運動の研究』鈴木中正（編），491-558 ページ所収。東京：東京大学出版会.
- . 1986. 「ジャワ神秘主義の民族誌」『国立民族学博物館研究報告』11(2): 383-401.
- 土屋健治. 1978. 「ジャワ知識人の西欧認識をめぐる諸問題（1913 年～1922 年）」『東南アジア研究』15(4): 530-551.
- . 1983. 「インドネシアにおける政治と言語——バ・スロ事件の文化論的考察」『国際政治』（特集：国際政治の理論と実証）74 号：117-133.
- . 1990. 「知識人論」『東南アジアの思想』（講座東南アジア第6巻）土屋健治（編），308-334 ページ所収。東京：弘文堂.
- . 1992. 「アルマナック・ムラユ論」『東南アジア研究』30(2): 113-191.
- 山本信人. 2002. 「インドネシアのナショナリズム——ムラユ語・出版市場・政治」『岩波講座 東南アジア史第7巻 植民地抵抗運動とナショナリズムの展開』池端雪浦他（編），161-187 ページ所収。東京：岩波書店.

外国語文献

- Anderson, B. R. O'G. 1990. *Language and Power: Exploring Political Cultures in Indonesia*. Ithaca: Cornell University Press.
- Budiyanto, Ary; and Latifah. 2019. Dampu Awang Legends and Its Contemporary Perception of Indonesian (Javanese) Muslim Against Chinese. *Journal of Integrative International Relations* 4(1): 49-71.
- Florida, Nancy K. 1995. *Writing the Past, Inscribing the Future: History as Prophecy in Colonial Java*. Durham and London: Duke University Press.
- Geertz, Clifford. 1960. *The Religion of Java*. Chicago and London: University of Chicago Press.
- Larastiti, C.; and Ahimsa-Putra, H. S. 2022. 4. Tanduran lan Mangsane: Etnoekologi Petani Di Mendak, Gunung Kidul. In *Etnosains, Etnoekologi, dan Etnoteknologi: Antropologi Mengungkap Kearifan Lokal*, edited by Heddy Shri Ahimsa-Putra, pp. 109-154. Yogyakarta: Kepel Press.
- Mulder, Niels. 1998. *Mysticism in Java: Ideology in Indonesia*. Amsterdam and Singapore: The Pepin Press.
- Suryadinata, Leo. 2015. *Prominent Indonesian Chinese: Biographical Sketches*. 4th ed. Singapore: ISEAS Publishing.
- Tribuana Said. 1988. *Sejarah Pers Nasional dan Pembangunan Pers Pancasila*. Jakarta: CV Haji Masagung.
- Utami, Niken Wahyu; Sayuti, Suminto A.; and Jailani. 2019. Math and Mate in Javanese "Primbon": Ethnomathematics Study. *Journal on Mathematics Education* 10(3): 341-356.
- Wisnu, M. Hum. 2023. *Boekhandel Tan Khoen Swie Kediri: Agen Kebudayaan Jawa 1915-1963*. Jakarta: Elex Media Komputindo.

資料

- Anonymous. 1971. PERS: Kembalinja Wong Kam Fu. *Tempo* 1(5): 39–40. March 27, 1971.
- Anonymous. 1975. Empeh, ‘Gimana Nasib Saya...?’ *Tempo* 5(16): 45–48. June 21, 1975.
- Anonymous. 1985. MENINGGAL. *Tempo* 29(49): 15–16. January 12, 1985.
- van Hien, H. A. 1896. *De Javaansche Geestenwereld en de Betrekking, die Tusschen de Geesten en de Zinnelijke Wereld Bestaat, I. De Primbon’s*. Djakarta: G. C. T. Van Dorp & Co.
- Moerthiko. 1979. Biografi Empeh Wong Kam Fu. In *Pelita Hidup*, edited by Moerthiko, pp. 423–540. Semarang: Sekretariat Empeh Wong Kam Fu.
- Sekretariat Empeh Wong Kam Fu. 1979. Riwayat Singkat Penulis Murthiko. In *Pelita Hidup*, edited by Moerthiko, p. 573. Semarang: Sekretariat Empeh Wong Kam Fu.
- Tan Hong Boen. 1935. *Orang-orang Tionghoa Jang Terkemoeka di Java*. Solo: The Biographical Publishing Centre.

プリンボン

プリンボンについては表1をもって代替する。

ブログ

- Ad Rek. 2013. De boeken van Van Hien. Java Post. August 30, 2013. <https://javapost.nl/2013/08/30/de-boeken-van-van-hien/> (最終閲覧 2026/02/07).